

早稻田學報

大正七年 第貳百八拾二號 八月十日發行 每月一十日發行

得業式號

本號要目

◎得業生諸君に告ぐ

大隈總長

●得業證書授與式

●工手學校卒業式

◎評議員會例會

◎教授會規定

◎中央校友大會

◎校友動靜

東京牛込

早稻田大學校友會

電話號碼五三〇〇番

東京八八九六番
掛號金口座

意見

得業生諸君に告ぐ

(七月五日得業式に於て)

總長 侯爵 大隈 重信

諸君、本日は炎暑の候、殊に雨天であるに拘はらず多數御來會下さつたことを謝します。學生諸君、諸君の數年間勉強せられて、今日此名譽ある卒業證書を得られたことを祝します。是は例に依つて祝する譯であるが、此祝辭は諸君の數年の勉強に對する最も大切な言葉であつて、諸君の前途に向つて恰も勇者が敵に向つて出陣するのを祝すると同様な意味を含んで居ります。既往を顧みると諸君が長い間、小學校から言つたならば十有餘年の間、勉強された所をの追懐して見ると、諸君の希望、諸君の將來に於ける希望は諸君の境遇と諸君の才能とに依つて種々に書き出されて來たことだらうと思ふ。其希望も多分諸君が小學校から中學校、中學校から高等豫科に這入るまでには、段々と變更して來て居ると思ふ。而して此大學に入つてからも、始めて入つた時と今日とは多少諸君の將來の希望の上に變更を來して居るかも知れぬのである。老練なる名將も參謀官も敵に向つて戦ふ時には其戦術を畫くに時々變更する所がある何故に變更するか、一見すれば先見の明又は定見がないやうであるが、決してさうでない苟くも戦ふには對手がある、相手の模様に依つて變化しなければならぬ。諸君が社會に活動するに當つて、社會状態が變化すると、諸君の活動も夫れに従つて趣が變つて來なければならぬ。是が即ち勢に投ずるのである。勢に従つて行くのである、勢が變れば夫れに依つて活動が多少變ることは論を俟たぬのである。抑々人間は理智の發達に依つて聰明なる判斷力を生ずる、其判斷力のない人が保守的な頑固な人で、遂に一世を誤まる、斯う云ふことになる。所が此判斷が餘程むづかしい。自から自己を知ることには比較的易いが、社會は分らぬ。自己の活動する戦場の事は分らぬ。茲に於てか迷ふのである。殊に今は思想界にも現實界にも有史以來の大變動が起つて居るのである、大波動が起つて居るのである。諸君が學校へ入る時代には此大波動は起つて居なかつた。今や其波動が大分永く續いて居る止むには相違ないが、容易には治まりさうにもない。大波浪の爲に社會は如何なる變動を受けるか、世界は皆迷つて居る。立派な政治家も思想家も宗教家も又實業家も迷つて居る。利己一方で私利を貪る者も、算盤を抛つて劍を執つて敵に向つて居る者が頗る多い。即ち利己的の人が戰の爲に私を棄て、社會の爲め國の爲め尙ほ大きく言へば人類の爲に、禍を防がうとして努力して居る。命を棄てる。云ふ犠牲的精神が起つた。亞米利加の如き實に世界に冠たる富を持つて居る國であるが、此富を作つた人達が私の利益を棄て、國家の爲め社會の爲め又人類の爲に活動して居る。富を棄て、働いて居る。命を棄て、働いて居る。吾人の聯合國たる英人も佛人も同一である。而して此禍は果して防ぐことが出来るや否やと云ふことに付いては、思想界も政治界も非常に感つて煩悶して居る。思想の上にて大變化が起る。思想の大變化が

起れば人間の實生活の上にも大變化が起る。實生活に於ける大變化は何になるかと云ふと大なる社會問題を起すのである。今は社會問題を恐怖して居るやうな世の中ではない。大波動が起つて吾人が其渦中に投ずると之を如何ともすることは出来ない。勇者も智者も如何ともすることが出来ない。どうしても勢に乗ぜなければならぬ。其勢が起ればどうしたらいよかと云ふと、之と戦はうと云ふ人は之に應ずる準備をする必要がある。世人を知つて居つても社會を知らず、社會を知つて居つても社會が如何に變ずるかを知らぬ、此際に於て諸君の出陣をするのは實に時機を得たものである。此の如き好機會は他にない。人間は機に乗じて勢に従つて、或る場合には勢を制し或る場合には勢を作つて活動すべきものである。さう云ふ世の中に働いてこそ眞に働き甲斐があるのである。諸君が學ばれたことを事實に應用するにも沈滞したる社會では面白くない。斯の如き社會に於ては、相當の教育を受けたものも無學な人も、大なる違ひはないと云ふことになる。相當の教育を受けて其學術を應用し利用すると云ふには、社會の變化極まりなき時が最も妙である。さうすると、諸君の今日の出陣は平日よりも甚だ興味ありと謂はなければならぬ、併ながら、他の一方から云へば、非常に危険な出陣である。一ヶ月前に、露國の或る東洋的豪傑が私を訪問した。何かの雜誌に其人の談話が出て居つたはづであるが、夫れは唯一部分に止つて居る。私は其後二回會つたが、愈々會へば愈々面白い。其人は諸君よりは先輩だけれども、まだ四十にならぬ若い男である。容貌は

どうかと云ふと、諸君はルーズヴェルトの寫眞を見たことがあるだらうが、寫眞で見ると全くルーズヴェルトのやうである。非常に健實な高尚な強固なる意志を有つて、何だか一癖あり氣な顔色である。段々話をして行くと、如何にも露骨な率直な、或る意味から云へば圖々敷しい實に大膽不敵な男である。諸君學生の仲間へ入つたならば、餓氣大將の地位を占むべき人間だ。話をして居る内に段々面白いことを言ふ。哲學的の言葉を澤山使ふ。いろ／＼な比喻を言ふ。そこで、お前は學問をしたかと聞けば、俺は無學だ、俺は百姓だと云ふ。どうして今のやうな地位を得たかと云ふと、實は俺は十五六までは、馬を持つて土地を耕して、其收穫物を馬に載せて方々へ賣歩いて居たが、どうも是では何時までも身が立たぬと考へて、鋤を投じて、而してペトログラードの實業家の所へ奉公して、さうして仕上げた。夫れで無學である。併し無學では困る。色々な事業に活動するには經濟學が宜からうと思つて、經濟學者を雇つて夜分勉強した。所が、餘り面白くない。併し、今日自己の地位を得るに従つて、どうも無學では困る。そこで學問をする。自分は一日に三時間眠れば宜い。ナポレオンは三時間寝ただけでも、非常な神經衰弱症に罹つたが、自分は弱らない。三時間眠るだけで一向疲れぬ。さうして、いろ／＼哲學者や何かを雇つて夜分勉強する。今でもやつて居る。此先生は人生を悉く哲學的に考へる。經濟も哲學、實業も哲學、何でも皆哲學でやつて行く。現在の文明は物質的の文明である。併し、人間は機械ではない。人間を機械にするからいかぬ。露西

二

亞を亡ぼしたのは何であるか、獸のやうな獨逸人が來て、人間を機械にしようとした、三四百萬人も之が爲に機械のやうな人間になつた。夫れへ役人が一緒になつて、到頭露西亞を叩き潰して仕舞つた。と、斯う云つた夫れから比喩が面白い。百姓だから馬を年中使つて居るが、馬を使つて見ると、餘り使ひ過ぎると馬が疲れる。馬に對して氣の毒だと云ふ同情がある。そこで今少し仕事をしたいと云ふ場合でも、先づ馬が疲れるから止め。是が人間に就いて最も考へなければならぬ所である。人間はさうでない。機械は一向疲れないが、人間はさうでない。そこで、今日の世界では人間を機械にして居る。機械にして居るから、到頭人間の價値を金と化してしまつて、偉さうなことを言ふけれども、人類は皆猶太人になつてしまつた。自分は、ジューは最も嫌ひだ。ジューのやうな獨逸人は嫌ひだ。夫れで、日本にはさう云ふ風が少ないと云ふことだから、日本人と一緒になつて働いて見たい。斯う云ふ考でやつて來たと言ふ。此人はどれだけの仕事をやつて居るかと言ふと、八十萬人の人を使つて居る。其内には、英人も佛蘭西人も獨逸人も居る。多分今日は英國大使館で御馳走になつて居るだらうが、何しろ著名の英人を澤山使つて居る。さう云ふ關係から大使館へ招待されたらう。八十萬人の人を使つて居ると云ふのは、實に大規模だ。其家族を加へると、五百萬人の人間が此人の力の下に生活して居るのである。まだ年は四十にならぬ。此位な地位を有つて居るにも拘らず、土百姓の穢ない着物を着て、夜も寢ずに勉強して居る。自己が教育を受け

なかつたから、今度は人を雇うて夜間に勉強する。其精力は實に盛んなものである。此の如き精力があればこそ、無學でも尙且つ大成功をなしたのである。七十幾つと云ふ事業をやつて居る。其七十幾つの事業に投ぜられて居る金は五十億留と云ふ、實に驚くべきものである。是れが土百姓なのである。率直な人で、吾輩と一緒に飯を食つて居て、面白くなると飯を食ひながら立つ、立つて大きな手を出して踊る、實に壯快である。お前の事業は今度破壊されてしまひやしないかと云ふと、イヤ如何なるものも破壊することは出来ぬ。何となれば、一億何千萬と云ふ貧乏な百姓は俺の友達である。之が怒れば、夫れこそ大革命だが、抑々自分の事業に付いては一回も政府の助けを藉つたことはない。役人などに碌な者はない。役人は國を亡ぼす。役人は獨逸に騙された。役人は猶太人だ。金の外に何も無い。役人が人間でない獸物のやうに取扱つて居る所の農民は俺の友達である。俺の身體に誰だつて手を出すことは出来ない。寧ろ今の露西亞を恢復して盛んにするのは俺の力にあると、斯の如く述べた。此調子はルーヴヰルトに酷似して居る。さう云ふ大言は實行が伴はぬといかぬが、是は事實實行が伴ひさうだ。此の人には立派な學者や技師が澤山付いて居る。著名の技師も居る。夫れを小僧のやうに使ふ。さう云ふ先生達が此土百姓を非常に尊敬して居るのを見ても、何處かに技倆のあることが分る。詰り其技倆を事實に應用して成功したのである。之れから亞米利加へ行くと云ふことである。それから又論じ始めた。人間は如何なる繁劇な仕事を持たう

とも、本を讀まぬといかぬ。さうでない、此物質的の唯金と云ふことに捕はれて、身心は墮落してしまふ。俺は忙しい體であるに拘はらず、哲學者を雇ひ、さうして、頭が非常に熱して來ると、哲學で以て叩筒を向けて頭を冷す。さうして勉強すると、斯う云つた。元は無學であつたが、日々なしくづしに二時間三時間やつたので、相當の學者になつた。到頭後に立派に書面も書くやうになつた。其書面は固より露語で綴つたのであるが、夫れを英語に翻譯したのを見ると、非常な名文だ。此人は日本へ來るのを喜んで、吾輩を眞の友達だと言つて居る。方々で御馳走などを受け居るが、どうも眞に友達と思ふものに遇はない。世界の老人に何人も遇つたが、實にあの老人は一風變つて居ると云ふやうなことで友達になつた。夫れで親切なる手紙を寄越した。

之は諸君に少し滑稽に類するやうな話をするやうだが、決してさうでない。全くさう云ふ人間が現はれて來たのである。其人間が大活動をして居る。七十幾つと云ふ事業をやつて居る。ベイリングから中央亞細亞からあの邊に手を擴げて居るが、此所に八十ばかりの爺さんが居る。之が友達である。其人は此所に大なる製造所を持つて居る。之が非常な友達であると言ふ。併ながら、此人と自分と一つである。夫れは何であるかと云ふと、自分は一人の妻を持つて居るが、此爺さんは三十六人の女を持つて居る。此爺餘程強い爺と見える。ベイリングで漁も盛んにやつて居れば、鑛山も森林も製造でも何でもやる。銀行もやる。夫れだけの精力がある。さうして、富を得て、少しも贅澤をやらぬ。さうして學校を到る所に造つて居る。將來の人間を拵へると云ふのである。夫れで尙且つ勉強する。此事實は、諸君の多少參考になるだらうと思ふのである。此人間の限りなき精力は、何から起るかと言ふと體力ばかりではない、強い意志の力である。而して事實の上から學問の必要を感じる。應用の上から其必要を感じる。さうして、傍ら勉強する。もう夫れ位の地位を得れば、そんな事は止めても宜かりさうだが、矢張り種々の學者を伴つて、始終勉強する。全體、歐羅巴人は先祖からさう云ふ風があるから知らぬ。併し夫れも遠征か何かやる時より外には餘り學者を連れて歩くと云ふことは無いやうだ。歐羅巴に於ては、希臘のマセドニアの王様のアレキサンドル大王の印度遠征などには、夥しい學者を連れて往つた。近くはナボレオンの埃及遠征の時も、多くの學者を連れて往つた。事業が先きになつて學問が後になるか、學問が先きになつて事業が伴つて來るか、どちらにしても、學問と云ふものは必要である。今此四十に近い人が非常に勉強して居る。酒も飲まぬ、煙草も喫まぬ、三時間寝て跡は勉強する。諸君は何如なる考を以て學問をしたのであるか、如何に社會が變化しようとも、如何に思想の變動が起らうとも、人間が其時に臨んで、而して自己の學問を以て之を應用して働くと云ふ爲めに學んだものと思ふ。併し諸君は長い間勉強されたけれども、學問の原則を學んだだけのことであつて、未だ不十分である。是れから事實に臨んで、尙ほ足らざるを感じる。又感するぐるんでなけ

れば、諸君の事業は發達せぬ。さうすると學
校を出て、如何なる繁劇な仕事に就かうと
も始終本を讀んで行くと云ふことは必要であ
る。讀書を止めたら、活動は止つてしまふ。
僥倖に富を得ることがあるかも知れぬが、此
の如き富は餘り面白くない。さう云ふ富は却
つて有害である。今申した露西亞人も言つて
居つたが、富其物を社會の上に國家の上に人
類の上に働かせようと云ふ、斯う云ふ考から
して、物質的文明を非常に呪ふ、是れは哲學
から來た思想である。自己の事業は計數一方
でやつて居るか云ふと、決してさうでない。
始はさう云ふ積りでやつたが、段々改めて學
問をして、凡て事業を哲學的にやる。斯う云
ふ考で、今盛んに哲學を研究して居る。そこ
で、哲學的の費用が餘程多い。彼が寄越した
其書面は、公けにして宜いと云ふことである
から、今に公けにするかも知れぬ。

そこで、今諸君の出陣を祝するに付いては社
會が如何に變化しても、夫れに應じて行がな
ければならぬ。今や、思想界には非常な變化
が起つた。今平沼博士も言はれた如く、東西南
北の調和は吾輩が三十年一日の如く説いて居
ることである。此學校を拵へ學問の獨立を高
唱するものも、皆基く所は此意に在るのである。
茲に日本の天職は東西文明を調和した所の日
本の新文明を以て東洋に宣傳しよう云ふに
ある。或る意味から云へば、日本の卓越した
所の帝國主義を以て、世界の帝國主義と平和
主義、或は民主主義などの調和を指すのであ
る。之を解釋するものは、日本の外にない
信する。帝國主義と云ふと何だか物騒の言葉
になつて居るが、是は大なる間違である。日

本の帝國主義は他の物騒な輩を取押へる主義
である。一言にて言へば、仁義の主義である。
即ち王者の道である、王者の道は平和主義で
ある。民を安んずるのである。王者は即ち極
端なデモクラシーである。此間に何等衝突は
ない。即ち日本の帝國主義と亞米利加のウキ
ルソン大統領の盛んに唱へる所の民主主義
と、何等衝突はしない。之を解釋するのは日
本の外にないのである。是が東西の文明を調
和する根本の主義である。之は諸君が常に頭
に置かなければならぬ。歐羅巴の哲學者や思
想家の言ふやうな議論は、少しも頓着するに
及ばぬ。日本は日本で、特得の哲學を有つて
居る。特得の思想を有つて居る。此日本の帝
國主義は、十分に人生を解釋することが出來
るものである。而して其文明の調和は日本に
非れば出來ない。さう云ふ時に、諸君は社會
に出て活動するのであるから實に面白い。諸
君の勝利は疑ひないのである。其意味に於て
諸君の今日の卒業に向つて私は大いなる同情
を表し、且諸君が其大なる責任に向つて勇往
奮闘されて、國家の幸福を増すと共に自己の
幸福をも得られんことを望む。

校報

●維持員會例會、七月十九日午前九時より恩
賜館に於いて開會。豊川良平鈴木喜三郎兩氏
缺席の外各維持員出席。協議決定する所あり
て散會せり。
●評議員會例會、七月三日午後三時より總長
大隈侯爵邸に於いて開會。出席は
大隈總長。平沼、徳永、内ヶ崎、宮田各理

事。三枝宮川兩會計監督維持員大隈信常氏
評議員
伯爵松平頼壽、坪谷善四郎、中野禮四郎、
野間五造、前島彌、松井郡治、降旗元太郎
井上辰九郎、早速整爾、田中四郎左衛門、
中野鐵平、山田英太郎、増田義一、齋藤和
太郎、池田龍一、羽田智證、渡邊亨、柏原
文太郎、高根義人、中村康之助、村井五郎
浦郎襄夫、松山忠二郎、昆田文二郎、齋藤
隆夫、廣井一

諸氏にして、先づ平沼理事より本會會長の任
期満了したるに付き更に選舉を求められ選舉
の結果伯爵松平頼壽氏の再選を見、乃ち松平
氏會長席に就かれ、一場の挨拶ありて開會を
宣せらる。
斯くて平沼理事一學年間に於ける校務教務及
會計に關する一切の状況を約一時間に亙り詳
細に報告せられ、後ち大正七年度經常收支假
決算書を提出し、詳細に之を説明して承認を
求め、更に大正八年度經常收支豫算書を提出
して該年度に於ける會計上の方針を詳説して
承認を求められたる處何れも異議なく承認を
得、終つて寄宿舎に關する件其の他に就き意
見を交換して議事を閉づ。

閉會の後ち一同食堂に入りて晚餐の饗を享け
席上大隈總長より大學の發展に關し特に大講
堂及寄宿舎建設等の事に就き詳々演述あり。
次いで松平會長一同に代りて謝辭と共に總長
の意を體して努力すべき事を述べられ、尚ほ
一同歡談に時を移して八時過散會せり。
●教授會規定、六月廿九日の維持員會に於い
て決定せる教授會規定左の如し。
教授會規定

- 第一條 教授會ハ各科部教授ヲ以テ之ヲ組
織ス
 - 第二條 教授ノ部屬ハ學長之ヲ定ム
 - 第三條 教授會ノ議事ハ科長部長之ヲ整理
ス
 - 第四條 學長ハ教授ノ方針教則ノ改正等教
務ニ關スル重要ノ事項ニ付キ議案ヲ教授
會ニ提出シ其審議ヲ求ム
 - 第五條 教授會ハ校規の定ムル所ニ依リ選
舉及推薦ヲ行フ
 - 第六條 教授會ハ教務ニ關スル發案ヲ爲ス
ヲ得
 - 第七條 教授會ノ決議ハ學長之ヲ實行ス
- 附 則
- 一 本規定ハ新校規實施後維持員會ノ決議ヲ
以テ之ヲ改定スルモノトス
 - 文部省より科學研究費補助、科學獎勵の爲
め文部省より今回拾五萬圓を研究者發明家等
に補助するとなり。本大學に向つても目下研
究中の理工科探礦冶金科教授理學博士徳永重
康氏及理工科教授小室靜夫氏同助教野村堅
氏への爲め本邦産「ニツケル」鑛の地質學化學
研究費として補助金壹千貳百圓を交付された
り。由來「ニツケル」は米國內の一洲と「ニユ
ーカレドニア」の外世界産出極めて稀れにし
て我國毎年數百萬圓の輸入も此地方より仰き
居れり。今回徳永教授の發見せしものは幅員
百尺延長壹里に互れる大鑛床にして、本邦に
於ける最初の發見と稱す可く、其の研究は同
氏全體を總括し、製煉に關しては理工科教授
小室靜夫氏選礦に關しては同助教野村堅氏
擔當して研究を續行する筈なり。

● 得業證書 授與式

七月五日第三十五回得業證書授與式を舉行す例に依り銅像前中央廣庭に芙蓉形大天幕を張りて式場に充つ。定刻前より校門に集り來る新卒業生の顔貌には潑刺の生氣躍り、朝來の小雨にも拘はらず、前庭より櫛り入る自動車腕車には朝野の名流紳士引きも切らず、本日の盛儀を思はしむ。

午後三時突如として鳴響く號鐘と共に起る嚨曉たる奏樂に連れて得業生學生父兄保證人來賓順次式場に入り、續いて校旗を先頭に總長大隈侯爵、博士平沼理事、博士德永理事、内ヶ崎理事宮田理事を始め教職員一同式服用用拍手に迎へてられて入場す。

やがて前田幹事に依つて擧式の宣せらる、と共に奏し出さる、樂音に伴れて一同起立合唱する校歌勇ましく嚴肅の氣場に充つ。

斯くて平沼理事登壇。奏樂の裡に各科得業生壹千二百二十九名に得業證書を、各科優等得業生に大隈侯爵夫人寄贈の賞品を、各科の特待生に特待證書を順次授與せられたる後ち、

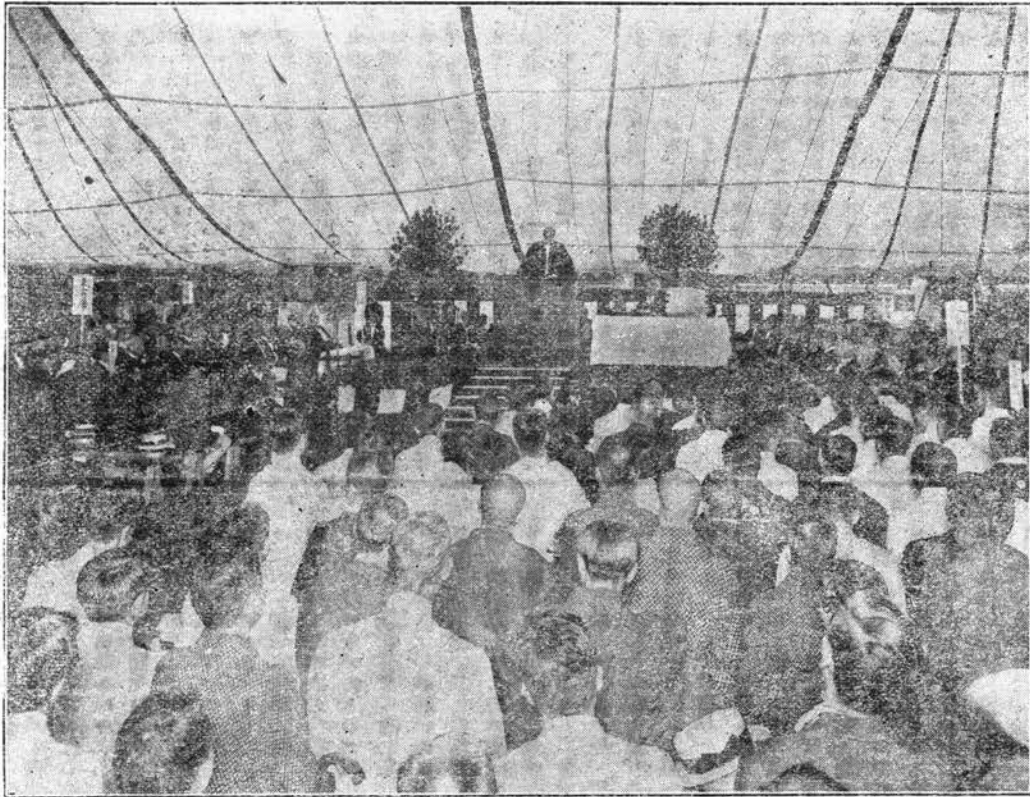
理事平沼博士

來賓諸君、今日は雨天にも拘りませず、多数御來臨を辱う致しましたるは本大學の最も光榮とする所でありませす。深く御厚意を感謝致します。例に依りまして、本學年中の状況を概略御報告致します。

第一に申上ぐべきことは我が大學幹部の組織であります。昨年の九月校規の一部分を改めまして、學長を置かずして理事制を施すことになり

ましたのであります。越えてその月の十二日に至りまして、新なる維持員會の組織が成立を告げたのであります。その成立は教授會並に評議

を互選致しまして、理事が法律上の責任を帯びまして、校務を經營すると相成つたのであります。理事五名の互選に依りまして、その一員



第三十五回得業證書授與式

員會より幹事委員を選出になりまして、その幹事の結果に依つたのであります。かくの如くして新たに組織せられたる維持員中より理事五名

あります。これがために校規の改正を要するのと相成つたのであります。その結果維持員會に於きまして昨年十月一日に校規改定調査委員

規程を設けたのであります。その結果、維持員會評議員會並に教授會より各々七名宛を選出致して、都合二十一名の調査委員が出来ましたのであります。而して他の一方に於きましては理事會に於きまして十數回の討議を重ねて原案を作成して、これを維持員會に提出致しましたのであります。維持員會に於きましては數回の審議を盡された後、これを校規改定委員會に提出になりました。委員會に於きましては、これまた數回の審議を経由して六月の十四日に至つて始めて決議を見たのであります。その決議案をば校規改定調査委員規程に依りまして再び維持員會の議に付しまして、而して維持員會は六月十八日に開會致しまして、こゝに維持員會に於ける最後の決定を見たのであります。而して校規の改定は主務官廳の認可を得なければならぬのであります。これが爲めに翌十九日認可申請書を東京府廳に提出致し、二十二日にこれを經由して文部省に移しまして、目下文部省に於きまして審議中であるのであります。今日の卒業式に際して改定校規の内容を發表致したき希望を有つて居つたのであります。未だその機に至らざることは私の遺憾とする所でありませす。しかしながら主務官廳に於きましては、遠からずして認可を與へられることと信じて居るのであります。認可を得たる時には、それ、行政上の手續を經由して、本大學に認可書を下付せられることになるのであります。故に諸君の御覽に供することを得るに至るのも蓋し餘りに遠からずと想像致します。

本學年に於いて施政致したるもの、中從來と聊かその趣を異にして居るものがあります。それは入學生に對する學力の考査であります。從來本大學は一切衆生草木國土悉皆成佛と云ふ主義を以て收容力の許す限り或る資格を定めて入學希望者の入學を許可したのであります。

海に奇特と申す外はないのでありますが、しかしながら入學生の學力を均すと云ふ上に於きましては幾分の學力の考査を行ふのが必要である

と云ふことは大學内部に於きまして衆論の一致する所であつたのであります。これがために本學年より學力考査を施行すると致したのであります。その結果本年の四月の入學に應募致したる者は二千四百五十八名、此中合格者が千三百七十九名と云ふことになつて居るのであります。尤も其中に八十餘名と云ふものは中學校の優等生でありまして、これに對しましては或程度を限つて無試験入學を許したのであります

又來る九月に於ける大學専門部の新入學生に對しましても同じく學力考査を施行すると云ふに先般の維持員會に於いて決定になりました。現在の教職員に就いて申し上げますと、教授助教講師の總數が二百九十一名でありまして、これが如何に分配されて居るかと申しますと、教授が八十五名、助教が十三名、講師が百三十二名の外に附屬學校たる所の工手學校に嚮托を致して居ります講師が六十二名ありまして、職員は總數二百二十九名でありまして、その中理事並に維持員が十五名で、これを除いたるものが幹事より給仕小使に至るまでの總數であります。次に海外留學生の狀況を御話し致します。唯今海外に留學を致して居ります所の者が總計六名あります。その學科別を云ひますと、倫理學農業政策、一般經濟政策、金融、銀行、自治制並に佛蘭西文學の六科であります。本學年中に留學生の歸朝致した者は三名あります。即ち民法露西亞文學、建築學各一名であります。また學年中新に派遣を致すべき豫定の者が電氣工學科一名であります。

次に圖書館の藏書は部數に致しますと七萬七百七十一部、冊數に致しますと十七萬七千八百八十二冊、この外に寄託圖書と申して、他から

保管を托されて居る圖書があります。これが六千百二十二部、二萬八百九十九冊あります。館内閱覽室に於きましての閱覽人員は本學年に於きまして十三萬五千七十七人、これに對して貸出しました圖書が二十五萬二千九百一十一冊に上つて居ります。

現在學生の數は、五月末の調査に據りますと、總數一萬六名、從來は一萬を超過致したことが無かつたのであります。本年に至りまして、僅少とは申せ一萬を超過致しました。その中大學部三千百十七名、専門部千八百三十三名、高等師範部三百四十九名、高等豫科三千四百八十九名、研究科十九名、聽講生二十名、附屬工手學校千九百二十九名であります。これを前年度五月末の現在數に比較致しますと總計に於きまして四百二十四名の増加を示して居ります。その外早稲田中學校並に早稲田實業學校の兩校があります。この兩校は經濟を異にして居ります所の別個の法人となつて居りますが、これを併せて早稲田學苑と總稱して居るものであります。から、こゝに加へて概略を御報告致して置きます。學生の現在數が早稲田中學校九百名、附屬高等豫備校六百名、早稲田實業學校千七百七十五名となつて居ります。

得業生の數は唯今得業證書を授與致しました者の總數が千二百二十九名であります。その學科別は先刻來賓諸君に御分配申し上げました所の表に現はれて居ります通りであります。創立以來昨年までの得業生の總數が一萬三千八百八十六名でありまして、本年の卒業生を加へますと累計一萬四千三百五十五名になるのであります。

次に會計の狀態を概略御報告致して置きたいと考へます。本年五月末の假決算、假決算と申しますのは本大學の會計年度は八月三十一日を以て了るのであります。種々の都合上五月末日に於ける實際の收支と六月以降八月末までの收

支豫定額とを併せて假りに決算を致しまする慣例になつて居ります。本年五月末に於きまして假決算を致しました所の結果四萬七千四百五十五圓七十九錢五厘の剩餘を見て居るのであります。しかしながらこの金額中より致しまして、八月中に支出しなければならぬものであります。て、その支出額を除きまして尙翌年度に一萬六千七百三十九圓七拾九錢五厘を繰越し得ることになつて居ります。これによつて財政の狀態は比較的好況に向ひつゝあることを御承知置きを願ひたいのであります。

それから豫て本大學に於きまして大方諸氏の御同情を得て基本金並に記念事業として募集致しました所の金があるのであります。これに就きましては來賓諸君に對しまして特に御報告を申すべき德義上の義務があると信じます。第一期基金の申込額が二十六萬三千九百九十九圓九十六錢で實收致しましたる額が二十三萬四千三百二十八圓七十一錢、第二期の基金即ち理工科建設の爲に募集を致しました金が申込額九十五萬三千九百九十五圓七十八錢九厘、實收額七十二萬三千八百七十四圓九十錢九厘であります。その次に御大典記念事業として募集を致しましたものがあります。これは應用化學教室の建設又研究室等の設備の爲に募集を致しましたのであります。その申込額が六十三萬二千五百九十八圓九十八錢と云ふ額になつて居ります。而して今日までの實收致しましたる額は四十五萬二千六百七十四圓四拾五錢、尤もこの中には利子が加つて居ります。さう致しますると合計申込額が百八十四萬六千九百九十四圓五十二錢九厘、實收額が百四十萬四百七十一圓六錢九厘と云ふことになつて居ります。この金額の中では固定資金になつて居りますものが多數を占めて居るのであります。本年度に於きまして御大典記念事業基金中より支出致しましたものが二つあります。第

一は恩賜記念館の増築工事でありまして、記念館はそこにある煉瓦の建物であります。これは本大學内部の御方は能く御存じのことでありまして、本大學が第二期の擴張計畫をするに方りまして長くもその事が天聽に達しまして御内帑より莫大の金額を御下賜に成りました。しかしこれは普通の寄附金と同一にすることは出来ないと云ふ理由の下に、この建物を建築致しまして、これを恩賜記念館と稱し、永く聖恩の優渥なることを忘れざるの記念として居るのであります。この恩賜記念館に對しまして今回増築工事を致したのであります。これが第一であります。第二は御大典記念事業の寄附金の中に於きまして森村豐明會から用途指定の寄附金があります。即ち應用化學教室の増設であります。この教室は來年度に於いて設備を要するので、新幹部は就職早々にこれに着手致したのであります。即ち本大學の裏手に唯今煉瓦造の建物を建築しつゝあるのが即ちこれでありまして以上の報告は或は概略に過ぎたる儘であるかも知れませぬが、本學年の狀況はこれにて御承知を願ひたいのであります。

次に唯今得業證書を得られました所の得業生諸君に一言申し述べたいと存じます。諸君は今日多數來賓の前に於いて、この名譽ある卒業證書を得られたのであります。私は本大學を代表して深く御喜びを申します。諸君はかくの如き名譽を荷はれたのであるが、名譽とは如何なることであるか。古語にも名は實の實なりと云ふことがある。名譽は實があつてそれに伴ふ所のものでなければならぬ。かくてこそ名譽が眞の名譽となるのである。諸君が今日受けられた所の名譽に實質が伴はないと申すのではなからぬ。實質あればこそこの名譽を得られたと考へるのであります。しかしながら世間動もすると名を主として實を後にすると云ふ傾きがあるか

と思ふのであります。これ私の遺憾とする所でありませう。而して實質を鞏固にするには學校に在る時と世の中に出たる時とを問はずして奮發努力を勉勵しなければならぬと云ふことは疑を容れざる所であると考へます。而して奮發努力を勉勵することに就いて聊か注意すべきことがありと信するのであります。凡そ人間の事業には受身と働き掛けとの二面がある。即ち受動的と自働的とである。孰れも必要なるもので、消極的と積極的とのやうなものである。電氣は消極的の極端があらはれて始めて生ずるのである。軍艦を御覽なさい。防禦力と攻撃力とを備へて始めて完全なる軍艦が存在するのであります。防禦攻撃、消極積極共に必要なるものであると同じく奮發努力勉勵に於きましても受身も働き掛け、受働と自働とが共に必要である。しかしながら尙仔細にこれを觀察致して見ますと、進歩の秘訣は受身に在らずして、働き掛けに在ることと論を俟たぬと信するのであります。消極に在らずして積極に在ると云ふことは私は始終感じ居るのであります。古昔から文明の進歩の徑路を觀察致して見まして、古代の野蠻人の事業は總て受身的である。何事も神の慮なり天命する所なりとして、更にみづから發動する所のものは無かつたのであります。かくの如き境遇即ち人智蒙昧の世に於いて之を啓發する所の動機がなかつたとは云はないけれども、事々消極的受身的であるので進歩をすと云ふ上に於いては遺憾なき能はずと考へます。文明が進歩したる所の後は事業が總て積極的となる。働き掛けになる。即ち人がみづから進んで自然を征服することを努むるに至るのであります。我が國維新以來の状況を考査致して見ますと、この感念を大にすることがあるのであります。幕末より維新の初めに至りまして外交が始めて開かれた。それより以來は西洋の制度文物が滔々たる

勢を以て輸入されたのであります。それから以來日本の青年少年は何事も皆西洋より傳はるるものを採用して、模倣これ事とするに至つたことは諸君も御存じであると思ふ。何事も西洋でなければならぬと云ふことである。私もその風潮に感染した所の一人であつた。私は元來海無しの國の十三番と言はれる所の美作國の出身である。交通機關の設備甚だ不完全であつた時代には新鮮なる魚類を味ふことが出来なかつた。故に刺身の如きは食べたことはなかつた。魚の眞の味を知らなかつたのであります。それが始めて箸を負うて東京に遊んだのであるが、先輩からして西洋料理を食べなければ人に非すと云はれた。然るに幼時からの育ちが右の如きであるから、なつかしさを味ひ得なかつた。一度これを口にする、嘔吐を催すと云ふ有様であつた。しかしながら西洋の文物制度風俗を採用し、これを模倣しないものは人に非すと云ふことであつたからして、奮發努力勉勵してそれを味ふことを習つたのであります。習慣は恐しいものであつて、今日では何等の支障なくして西洋料理を味ひ得るのであります。この一例を以て見ても、其當時の状況如何を知るに足ると思ふのであります。しかし、かくの如きことはその當時に在つては必要であつたのであります。我が國には新しい文明と云ふものはなかつた。徳川時代の舊い文明が存在して居つたに止る。故に我が國の開發を計る上からは新しい西洋の文物を輸入することが必要であつたのであります。斯くせざれば今日の文明を來さなかつたかも知れないのである。その結果吾々が漸次實地的應用的に西洋の文明を消化することになつたのであります。こゝに於いてか生じて來た所の議論は即ち所謂東西文明の融和と云ふこととであります。西洋の制度文物を直ちにそのままに鵜呑みにすると云ふことは取りも直さず受

身である。この受身の時代に於きましては學術は到底進歩しないのである。東西文明の融和と云ふことになりまじたらば、半ばみづから造るものと云ふことが生ずるから受身と働き掛けが半分位になる。しかしながら尙進んで、考へますと、吾々大日本帝國の國民は積極的に文明の融和より以上に我が大日本帝國みづからの事業を起すと云ふ必要が生ずるであらうと思ふ。こゝに至つて始めて大日本帝國が眞に國威を輝かし眞に國力を維持することが出来るのであると私は常に考へて居るのであります。要するに積極的に自働的に事業を經營しなければならぬと云ふことに歸着するのであります。さて我が早稻田大學は本年に至るまでに三十年有五年の星霜を経て居ります。創業以來日決して淺しとは言はれて居りますが、しかしながら私立大學の經營者としてこれを見ますれば、今日に至るまで經營難と云ふ者は頗る大なるものである。これまでの規模に發達進歩致すに就いての經營者の苦心慘情たりしとは今更私に喋々するまでもないのである。私はこのたび經營の任に當つて愈々切にこれを感ずるのであります。我が早稻田大學の事業が今日に至るまで積極的でないとは言はない、即ち經營者の苦心の結果種々なる建設を爲し得たのである。がまだ種々からして經營を致さなければならぬ積極的の事業は多々あるだらうと思ふのであります。例へば本大學は大學と云ふ名稱を有つて居りましても、御承知の如く法令の上からは尙專門學校の下に支配されて居るのであります。今後我が早稻田大學は眞に大學たるべき所の資格を有して、眞の大學として認められると云ふことにならなければならぬ。この結果を呈せしむるに就いては奮發努力勉勵して我が早稻田大學の實質を鞏固にしなければならぬ。實質の鞏固は何に依て得らるるか。經營者が内容の充實を圖ら

なければならぬとは勿論であるが、しかしながら在學の學生は勿論學校を出て社會の事業に従事せられる所の諸君が實質を重んじ眞に大學の卒業生たる價値を存することを兒童走卒に至るまで認知せしむるにしなければならぬと存するのであります。今日まで我が大學を出でられたる所の諸君多くは隆々たる名聲を輝かして居るけれどもまだその域に到達して居ない所の人々も夥からぬのであります。希くは得業生たる所の諸君、今日得られたる所の名譽と共に社會に出られたらば實質を尊んで大學得業生たるの實を擧げられて、延いては我が早稻田大學をして名實共に日本中は愚か、世界中第一の大學たらしめるように致したいと思ふのであります。この効果を致すに就いては吾々經營者に責任のあることは疑を容れないけれども、責任の一半はこれを得業生諸君に分たざるを得ないと存するのであります。今日以後社會に出られましてもどうぞ我が早稻田大學を名實共に盛んならしめるやうに名實共に完全に事業に従事せられんことを深く希望を致すのであります。この一言を以て今日の禮辭と致します。

との學事報告並に訓示演説あり。次に總長大隈侯爵の訓諭演説あり。(意見欄掲載)

終つて順次大學部得業生總代石川勝治、専門部得業生總代鈴木孫三郎、高等師範部得業生總代井上宗四郎、支那留學生得業生總代凌驥諸氏の答詞朗讀あり。次いで校友總代田中四郎左衛門氏の祝詞朗讀ありたる後、一同起立洋々たる奏樂に伴れて國歌合唱。やがて閉式を宣す。

式後來賓教職員得業生には校内に於て饗宴、父兄及保護人には茶菓の饗應ありたり。

各科得業生、特待生及受賞者氏名

▲大學部

◎政治經濟學科

石川 勝治	山梨	大泉	甲造	宮城
新里音三郎	岩手	大坪 徹心	大分	
荒水 章	宮城	橋本 求	福岡	
堀口 功	岡山	横田愛三郎	愛媛	
島崎 一郎	神奈川	長谷川武夫	鳥取	
飛鳥井雅信	京都	平井 實造	大阪	
辨官 爲秀	鹿兒島	池田 重明	秋田	
柳瀬 道雄	福岡	柏倉 照夫	山形	
牛島禎太郎	佐賀	田上 友治	富山	
山本彦四郎	東京	中川 榮一	埼玉	
山脇 虎彦	大阪	池宮 末吉	大阪	
角田 文雄	京都	小林 實詳	馬	
齋木政太郎	三重	河合 注	岡山	
大久保清藏	青森	梁源 模	朝鮮	
高水 登	東京	吉田 勝	廣島	
那須善五郎	大阪	小林謙二郎	福島	
漆原 雄彙	香川	小倉 真俊	東京	
成田稻三郎	青森	漆原 久雄	香川	
内田 友三	岡山	立花 貞尋	静岡	
吉野 敏三	大阪	今井 孝暉	東京	
水野 久雄	福岡	南部 要	福岡	
吉野 盛義	東京	富井 常臣	奈良	
窪田悠三郎	福井	中村 次郎	福岡	
正山 三郎	新潟	澁川 正治	宮城	
赤尾 英治	兵庫	和泉 慶三	石川	
小松 正雄	東京	常政 眞作	山口	
中澤善右衛門	高知	樹永 静衛	福岡	
柿崎 嘉男	大阪	山田 純忠	奈良	
飯田 利信	福井	山田 純忠	奈良	
須東 忠三	群馬	松本 光史	東京	

土肥 圭稅	廣島	黃 毅	支那	
加藤 弘	北海道	小田切 孝	北海道	
伊藤 博文	愛知	山崎 忠雄	長崎	
荒井 兼吉	東京	小林彌重太	香川	
鈴木 和藏	宮城	富岡松太郎	兵庫	
中村三之丞	京都	西田五一郎	京都	
大熊金次郎	北海道	佐藤 與	福岡	
牧 湊	東京	長澤 春雄	島根	
張景 拭	支那	大森 元	栃木	
齋藤 寫治	鹿兒島	横 卯太郎	福岡	
堀江 武治	愛知	松原 常盤	福井	
後藤鐵次郎	愛知	駒澤 鐵三	東京	
道盛吉之助	兵庫	木村 正雄	山口	
柴 三郎	茨城	山本 五郎	佐賀	
堀見 潛	高知	小林 正氣	新潟	
杉原 敏一	京都	堀内 倫平	愛媛	
清水源一郎	兵庫	村井久太郎	岩手	
李 翰 章	支那	饒村 義明	新潟	
飯塚 久義	栃木	飯塚 知信	新潟	
岡村 二一	熊本	河井常三郎	大阪	
田沼 武	栃木			

◎法學科獨法科

島田 博	福岡	小山 胖	愛知	
渡邊喜三郎	栃木	吉田 春夫	東京	
井上 順次	京都	今田 四郎	大阪	
新谷準一郎	北海道	村主金三郎	三重	
長野小伊三郎	岐阜			

◎同英法科

大濱 信泉	沖繩	織田 和勝	愛媛	
持田 健	神奈川	渡邊 巖男	栃木	
山本 信政	東京	伊達 光美	東京	
越宗 壽男	岡山	小林 義貫	香川	
山本 文平	愛知	松岡 正之	香川	

◎文學科哲學科

青柳 宗平	山口	居孝 憲	支那	
久野海之助	愛知	今西國三郎	奈良	
河合 讓	岡山	上甲保一郎	愛媛	
柴崎 市郎	東京	大成 純一	愛媛	
香原 一勢	福岡	石川 紹智	石川	
坂本 實哲	岐阜	高橋長太郎	香川	
岡本 光玉	和歌山			

◎同英文學科(第一部)

柳田 泉	青森	吉田甲子太郎	東京	
竹内 秀雄	神奈川	生方 徹誠	群馬	
木村瑞一郎	知秋山	竹内 泰	長野	
大槻 憲二	兵庫	森 泰吉	東京	
淺野 支府	東京	西村 鎮彦	東京	

◎同英文學科(第二部)

金 與 濟	朝鮮	水谷 勝	東京	
岡田 三郎	北海道	井原 清一	山口	
長谷部 孝	三重	石田 延雄	福岡	
湯淺 勝義	福岡	榎本 秀夫	千葉	
植田 整三	香川	名取 堯	長野	
柏村 次郎	東京	豐岡佐一郎	京都	
市橋善之助	愛知	石井道一郎	岡山	
馬場勝次郎	東京	戸川 貞雄	東京	
板野 桂造	岡山	綿貫 六助	群馬	
阿部 陸三	東京	岡田龜三郎	東京	
須崎 國武	香川	西崎源太郎	愛知	
永井順一郎	静岡	濱田 廣助	山形	
今西吉治郎	大阪	加藤琴巳二	静岡	
古川 實長	崎			

◎同史學及社會學科

瀨沼 寛二	東京	小島 幸治	宮城	
玄相 允	支那	松田治一郎	長野	
小川 敏也	静岡	柴野 秀夫	新潟	
若森民五郎	静岡	山口 鏡水	愛知	
永野 幸平	静岡	秋本 宇平	東京	

◎商科

計十名				
-----	--	--	--	--

南方常太郎	和歌山	市原 俊雄	神奈川	角谷 伊藏	東京	原義一郎	山梨	梨原 行江	長野	喜多川悦三	兵庫	藤本作太郎	愛媛	小林 茂三	三重
影山海一	栃木	岡村 勇二	京都	小林誠一郎	北海道	大須賀輝治	新潟	岡本 詞郎	廣島	森勝太郎	東京	石橋 正徳	福島	若松 修一	福島
内田 喜一	埼玉	佐藤 悦藏	東京	鈴木 喜一	東京	阿井 國藏	廣島	室塚 鐵二	石川	田島 孝一	長野	堀田 謙二	大阪	大場 昇助	東京
田原鎌之助	東京	山中勝之助	東京	清水 勝	福井	森田 章	東京	菖田 清	東京	猪田 五一	滋賀	黒木 常吉	宮崎	後藤 音吉	静岡
鈴木 幸作	新潟	長谷川誠次郎	愛知	押田 辰生	三重	眞砂 新吉	和歌山	原 曠	岐阜	湊 眞五郎	大阪	横塚 徹	新潟	横地 恒丸	愛知
久保田徳爾	静岡	大館喜久男	東京	古野 喬一	福岡	寺澤増太郎	愛知	岡村 弘	山口	中村 雄二	山口	副島勝三郎	東京	荒川辰三郎	神奈川
松島 音松	兵庫	市瀬 珠鳥	取	藤吉 清頂	福岡	植松 精一	埼玉	宮山 勝	千葉	早川 春道	岡山	羽田常三郎	新潟	菊地安次郎	栃木
沖中 恒幸	大阪	小澤 衛	神奈川	中之庄谷三次郎	大阪	入江 千壽	岡山	横尾 旭	宮城	金澤 雅志	兵庫	濱島 辰雄	愛知	小出 隆	長野
飯村 俊雄	新潟	上坂 西藏	宮城	板桓 龍亮	島根	宮下誠太郎	兵庫	宮田 鶴次	岐阜	井口謹一郎	岡山	吉永 松雄	熊本	飯坂 留雄	東京
河合嘉久藏	岡山	白崎 政雄	福井	福澤 教	福岡	月本 松男	長崎	安谷屋 繁	沖繩	齋藤 捨六	埼玉	島田 佑一	熊本	中澤 信助	宮城
香川 政雄	岡山	辰巳 源東	富山	金刺 直一	東京	山岡醇一郎	滋賀	山本茂太郎	東京	川福 豐藏	静岡	吉田 佑一	熊本	飯坂 留雄	東京
入江 昌二	兵庫	大森 喜六	東京	松本農夫也	埼玉	山口 一郎	神奈川	佐藤 敏雄	東京	山田 敬爾	福井	中村 健壽	愛知	光高 英植	山口
川島 剛一	北海道	岡崎 節夫	山口	成田錠之助	東京	室 悌次	新潟	吉井 良康	宮城	林 賢二	福井	山口善三郎	東京	三浦 義邦	宮城
清水 文藏	岐阜	野尻陸一郎	茨城	竹林 誠一	大阪	小林 孫一	群馬	奥田 榮一	愛知	關 基	長野	有川 勇輔	鹿児島	北原 光躬	長野
田中 昌平	山梨	菅野 肇	宮城	藤田 眞	山口	上垣内新一	廣島	竹内善太郎	東京	柴 弘平	長野	島出 秀美	兵庫	宮田 保治	兵庫
矢野 久市	愛媛	瀧渥作太郎	静岡	竹村 温次郎	東京	中村 幸祐	長野	今村 實	東京	平林 俊彦	長野	谷河 英次	兵庫	阿部 恒吉	北海道
平田 保	長野	田中仙之助	長野	永山 幸一	岡山	中村 政次郎	和歌山	橋 義一	東京	高澤濱之助	栃木	犬塚 登	東京	阿部 確	栃木
松岡 正一	新潟	宮澤永太郎	山梨	小竹 忠一	香川	鈴木 理平	東京	片山 英次	東京	諸戸 一郎	三重	岩井 賢造	奈良	木村 木	東京
猪瀬 美計	東京	岡 生次郎	島根	池田 益雄	大阪	中村 勝正	兵庫	赤澤虎之助	宮崎	小林 喜幾	山梨	伊佐山清太郎	埼玉	尾澤平一郎	静岡
土屋 正	千葉	關口 齊	富山	林田頼之輔	福岡	岡田 利男	福岡	山口 康	新潟	村山 静雄	東京	伊藤 重雄	宮城	田口 豊	大分
大和田 稔	茨城	小出 正吾	静岡	犬塚 春芳	佐賀	宇式 令吉	京都	堀 義一	山形	大上 正一	兵庫	玉井辰五郎	東京	水谷淳三郎	岐阜
北村基治郎	京都	今城 英一	東京	有賀 梧樓	北海道	盧 俊 泳	朝鮮	吉原福三郎	茨城	巽 榮 吉	和歌山	山崎 茂	茨城	川上 中郎	栃木
内田豊太郎	群馬	白石 勝彦	愛知	持田 宗治	埼玉	野中 藤作	佐賀	蠟川 章	新潟	金子 悦郎	埼玉	谷口豊次郎	福岡	河野 通憲	高知
川端 通弘	長崎	藤井 仙吉	岡山	上田 英房	奈良	蘆田 秀雄	兵庫	廣田 三郎	徳島	山内 枝	青森	東間 巖	三重	谷口 清次	滋賀
土屋 功	山梨	足立 亮一	島根	山室 茂樹	長崎	大竹 新吉	新潟	中川清次郎	富山	秋山小次郎	東京	中西 顯三	静岡	森川 榮一	岐阜
西八條定孝	京都	堀江 正吾	茨城	水内日出高	岡山	志道 健治	山口	渡邊省三郎	愛媛	石倉 捨藏	福井	阿部康太郎	新潟	杉山 健一	東京
小島 文雄	埼玉	松岡 久治	福島	近藤峯四郎	和歌山	崎田庄三郎	長崎	早川與之吉	鳥取	満所信太郎	和歌山	前田 政勝	神奈川	加東秋二	東京
四王天正貫	東京	網野 和一	埼玉	鹽川清兵衛	長野	後藤 光和	大分	清水 喜一	新潟	平野 俊三	愛知	松尾喜三郎	東京	稻村 堅士	佐賀
山邊 二郎	長崎	中島 隆吉	富山	野田 保男	廣島	井關喜一郎	和歌山	法貴 宗一	京都	山口 重秋	東京	深澤 義弘	山梨	寺田 義勝	長崎
北條清三郎	長野	賀谷 傑爾	廣島	森田 信一	石川	藤原 誠一	廣島	阿部 直道	愛媛	富田仙之助	愛知	村木 清一	徳島	寺田 義勝	長崎
日吉 武雄	東京	高村 勇吉	兵庫	李 克 謙	支那	田坂 茂忠	茨城	横内 忠三	青森	金田清之助	東京	大野 憲吉	岐阜	武其 亮一	鳥取
大岩 節	千葉	佐土原勇介	宮崎	神谷 忠夫	山口	新谷 賦	東京	出口 眞言	熊本	小林 嘉吉	栃木	井上善三郎	東京	平川徹之助	福岡
廣瀬 忠義	山梨	佐藤 完憲	群馬	立野 正夫	大分	多田一二三	徳島	今宮芳太郎	東京	宮本 重國	宮城	紘田 清	北海道	岩倉 文祐	石川
村上 康雄	徳島	中島 傳吉	福岡	上坂 一雄	福井	八十島義男	石川	羽田 喜伴	千葉	岩佐 精一	東京	宮下 秀一	愛媛	高濱 淳治	兵庫
上杉 博次	静岡	川久保 浩	東京												

八田宗平	廣島	池田龍介	東京
立花盛枝	福岡	若林晴雄	群馬
平井秀造	大阪	木村與一郎	栃木
松田種三	大阪	渡邊富美雄	大分
宿谷好介	埼玉	飯島信道	山梨
小林謙二	長崎	小川保次	神奈川
久保田敏夫	廣島	小峰儀三郎	神奈川
前納光三	三重	土井真澄	三重
濱名孝	群馬	田口武雄	栃木
河野順三	宮崎	吉田清一	栃木
卯尾田毅太郎	富山	松原敏夫	香川
井上俊吉	山梨	矢島敏雄	東京
辰馬享藏	兵庫	三浦憲三	富山
岡島喜一	東京	中島勇三郎	茨城
岩波春海	長野	加納幸雄	東京
谷井好次	愛媛	山下健六	佐賀
山本喜作	神奈川	牧野繁	東京
三好幸三郎	新潟	須網護行	愛知
出羽正也	廣島	小坂勝藏	埼玉
星野英夫	新潟	廣瀬俊也	東京
長島一夫	埼玉	大澤定男	東京
森本安次	大阪	森島德三郎	奈良
對馬清一	香川	白井伊之助	東京
上野米吉	青森	高野敏二	兵庫
岸一郎	福井	佐久島順二	愛知
尼崎康一	長崎	増田幸次郎	大阪
渡邊幸三	東京	稻松喜一郎	鹿兒島
卷口一治	新潟	片山茂丸	熊本
片岡治郎	廣島	井關榮司	東京
桑原巳代治	福岡	齊藤真次	富山
奥谷庄治	茨城	中宮五一	東京
卜部退三	兵庫	岩田武英	神奈川
加藤秀三	東京	加藤五郎	高知
井上健治	兵庫	網塚德治郎	北海道
大久保寛	東京	中山榮一	茨城
上野龍雄	東京	梅田眞一	山口

高田軍三	東京	田中稔	神奈川
淺羽茂興	福島	酒井求馬	新潟
吉村健一	靜岡	高橋喜一	東京
中尾忠太	長崎	井尻芳治	山梨
勝本龍三郎	宮崎	一杉信雄	東京
野中久明雄	岡山	佐藤武雄	神奈川
山本松太郎	徳島	下田基治	東京
加藤三三	愛知	遠藤修	宮城
山田辰五郎	東京	石田昌男	廣島
安田正巳	大分	西尾四郎	東京
小林恭助	島根	山田信吉	東京
石川藤一郎	岐阜	水谷哲四郎	愛知
高木一	徳島	堀畑正一	福井
長谷川一	北海道	小水曾武	東京
柴田勝	栃木	齋藤友次郎	群馬
播磨徳次郎	山口	土谷清房	大分
石橋鏗太郎	佐賀	尾崎孝吉	石川
渡邊清綱	徳島	藤澤孟	岡山
青木剛	長野	杉田俊吉	大阪
牧善三郎	東京	子上佛一	靜岡
吉村甚兵衛	東京	沖田勇一	東京
竹内春生	山口	松井幹	鳥取
藤沼春吉	東京	大畑耕	岐阜
深井眞一	香川	山崎昌平	神奈川
内田鶴吉	新潟	根來隆三	大阪
野村由巳	愛知	櫻井宙一	熊本
藤下憲治	靜岡	岩根榮一	東京
鳥居春之助	和歌山	湯淺旋一	愛知
武田基一	埼玉	兒玉清澄	鹿兒島
奥田保三郎	兵庫		

◎理工科機械工學科

赤沼淳一	埼玉	相見襄次	京都
鈴木寅次	靜岡	大谷修也	岡山
莊田孝平	東京	關根弘之助	埼玉
村田榮太郎	東京	増本幸之助	神奈川

◎同電氣工學科

鈴木四郎	東京	市來誠一	東京
和久田政孝	石川	沼田新助	秋田
齋藤泰治	長野	富永順太郎	京都
吉野圭六	北海道	小笠原武志	山形
増野薰	茨城	古賀勝	東京
坂入忠一郎	茨城	鈴木辰次郎	東京
矢幡小太郎	福岡	三浦盛正	秋田
竹田虎雄	福島	高橋三郎	佐賀
來田大三	兵庫	石原隆三	東京
清水滋	福島	齋藤馬吉	福島
古屋了	熊本	小宮義壽	埼玉
上野資鎮	愛知	松本傳一	廣島
章鴻漸	支那	久場守陸	沖繩
網野俊作	埼玉	宇野勝一郎	和歌山
龍原辰衛	東京	佐藤安巳太郎	東京
川越發助	秋田	三木清	香川
比嘉賀成	沖繩	瀧田徹	福島
坂本大造	長野		

計四十三名

杉江敏雄	東京	大隅菊次郎	兵庫
代永泰	東京	山本五郎	鹿兒島
高木孝三	東京	村山茂	東京
谷口利光	東京	小川慶	東京
石橋勇一	靜岡	澤田義照	徳島
藤伊魁	石川	藤沼龍一	茨城
利根川松太郎	東京	甲斐原四郎	大分
矢部甲藏	長野	岡田傳治郎	三重
山根孝作	山口	寺山虎男	岡山
松島清	廣島	名邊隆義	新潟
江藤政市	福岡	辰巳民太郎	東京
舟戸武雄	兵庫	小林悦司	東京
鯨井淺吉	東京	寺田正	東京
永瀬恒延	富山	桂充	京都
中井保奈	山梨	蜂谷定	岡山

◎同探鑛冶金學科

奧野捨三	滋賀	毛利德三郎	東京
坂本信憲	香川	松本幸四郎	和歌山
小野寺長	巖手	半田宗一	廣島
木下忠六	佐賀	山崎篤造	靜岡
梶原七朗	山梨	大井哲夫	靜岡
橫濱鐵城	東京	安間一夫	東京
武田晴四郎	靜岡	小野楠一	長野
岡田庄三	愛媛	田賀綏良	鳥取
篠原規矩重	長野	大久保齊	福井
山田孝次郎	東京	板津直正	富山
勝浦英一	北海道	三富一郎	東京
猪野令宣	千葉	熊谷朋治	長野
船橋重次郎	長崎	中村一司	新潟
大久保克己	廣島	大林茂夫	愛知
淺倉俊景	東京	富澤生壽	群馬
土田彌治	山形	秋元辰造	東京
中村忠雄	東京		

計六十三名

◎同建築學科

菊池惟中	大分	村野藤吉	福岡
佐藤桂次	東京	三好貫一	東京
松ノ井覺治	山形	西野利雄	福岡
緒方一三	福岡	清野秀丸	東京

計十九名

鈴木 彌吉 栃木 布村 常勝 富山
鈴木 冬藏 東京 竹中 保壽 東京
小林 長三郎 埼玉 峰 好治郎 愛媛
配川 恒雄 東京 井崎 慎一 茨城
田中 周二 東京 丹羽 大次郎 東京
松村 恭三 北海道 五月 女恒三 栃木
角屋 信一 山形 小寺 泰 福井
大川 勇 埼玉 濱田 正三 大阪
八島 知 宮城 岩谷 英男 北海道
松澤 一松 福岡 田中 潤一 千葉
大曲 助太郎 長崎

◎政治經濟科

▲專門部

孫 蕨 燒 支那 彦坂 重次郎 愛知
二見 七郎 鹿兒島 中島 克己 京都
堀田 庄五郎 愛知 中西 賢爾 岐阜
田中 三治 大阪 宅 增次郎 大阪
渡邊 長太郎 北海道 棗田 秀二 廣島
水野 申三 愛知 光安 益己 福岡
長谷 敬止 東京 土田 潤 新潟
前田 孝行 石川 岩田 健吉 大阪
池田 涼一郎 長崎 松枝 保二 岡山
廣田 義徳 兵庫 多賀 谷芳三 山口
久野 清左衛門 靜岡 大島 秀雄 岡山
中村 宏 宮崎 園田 一藏 福岡
須藤 續 岩手 渡邊 宗三郎 栃木
遠藤 健次郎 島根 勳 修寺 允雄 東京
鳥山 貞治 京都 金 明 植 朝鮮
衣卷 魁二 兵庫 李 萃 勳 支那
佐藤 健太郎 富山 松崎 常治 福島
喜々津 前義 長崎 汶 尙 賢 支那
中野 震藏 岡山 增子 友時 岩手
丘 哲 支那 薩本 繁太郎 長崎
宮成 卯吉 山口 柯 宜 幹 支那
小林 環 茨城 中島 半三郎 長崎
高見 宗一郎 愛知 飯田 四郎 東京
平尾 豐 兵庫 大橋 弘之助 東京
竹中 清治 富山 上野 藏之助 靜岡
小川 市藏 栃木 倉智 秀雄 福岡
森 肇 長崎 栗原 三郎 神奈川
小笠原 長至 東京 張 肇 蔚 支那
濱田 辰吉 德島 三輪 茂 大分
最上 勇 宮城 蘇 建 春 支那
福井 雄三 北海道 大島 保義 愛知
鹽原 貞治 群馬 本間 勇吉 東京
伊藤 嘉平 愛知 古川 八郎 佐賀
中田 守仁 大阪 牧 元一 京都
依田 四瓦 長野 岸田 實 大阪
齋藤 登作 埼玉 松本 敏雄 福岡

宮城 全通 沖繩 橋本 松次 長崎
近藤 島 香川 海塚 彦三郎 廣島
松下 宗次郎 石川 磯部 眞雄 愛知
西田 正之 高知 朝田 舜一 大阪
岡 光次郎 東京 野島 親幸 富山
杉井 初太郎 千葉 永見 專一 長崎
奥村 武雄 東京 町田 輝 新潟
山崎 祐四郎 長崎 植原 武徳 群馬
佐久 重 新潟 岩本 善平 栃木
原田 三次 兵庫 吉田 鶴松 千葉
河北 警二 福岡 梅原 琢次 長崎
鈴木 寛次 福島 安島 康房 福島
佐々木 貞次郎 秋田 兔耳山 毅 佐賀
吉積 富夫 福岡 大橋 榮 千葉
二宮 謙 神奈川 中西 公信 石川
魏 象 賢 支那 井上 松雄 栃木
正司 齊雄 佐賀 渡邊 雄之助 秋田
志田 正雄 佐賀 古閑 友行 和歌山
山田 勝太郎 大阪 大井 派太郎 東京
盧 世 英 支那 福島 仁三郎 佐賀
阿部 勝次郎 新潟 中本 隆太郎 奈良
岡田 義雄 愛知 田村 每之 愛媛
長橋 善語 福島 元 潤 田 支那
井手 虎雄 佐賀 森岡 賢作 福島
比良 正吉 鹿兒島 戸田 卓 靜岡
(以下三年編入得業)
松平 有光 東京 渡邊 陸郎 山形
藥師 寺富雄 岡山 田端 秀雄 大阪
豐川 幸 德島 荒井 源太郎 愛媛

富田 亥七 石川 西川 丈雄 兵庫
小出 順造 廣島 甲村 信一 島根
山田 幸太郎 京都 武内 常太 大分
市島 九郎 新潟 小玉 樽次郎 奈良
白井 五百二 兵庫 田中 利喜太 岡山
藤川 政雄 大阪 八木 善太郎 香川
高谷 振作 大分 村木 好郎 山口
藤澤 鹿太郎 香川 內海 清一 廣島
眞子 博 佐賀 中村 萬次郎 靜岡
伊井 澤 齊 新潟 小島 信章 茨城
前田 利八 福島 呼野 義幸 東京
宮崎 宗二郎 福島 國見 健一 東京
竹内 成一 京都 馮 錫 藩 支那
幸村 四郎 德島 野田 辰雄 岡山
宮本 繁造 熊本 神谷 光一 愛知
江川 金吾 北海道 水上 藤右衛門 山形
倉田 太一 三重 山田 義男 愛知
龔 倚 珊 支那 二上 吉兵衛 富山
加藤 正敏 愛知 中島 榮 岡山
谷 松雄 香川 水野 寅治 愛知
小林 新治 兵庫 松永 弘人 熊本
三好 正雄 兵庫 飯田 操治 新潟
與水 直次 山梨 笠松 實 福井
大橋 兼次郎 東京 家坂 守吉 東京
楠野 賢逸 福岡 後藤 勇 岐阜
高根 澤長重 栃木 雁住 又朗 長崎
田村 直記 茨城 森安 雅由 岡山
(以下三年編入得業)
谷田 俊二郎 兵庫 増井 文藏 山形
清水 千太郎 長野 高橋 富太郎 山形
立花 克一郎 岡山 大久保 一也 大分
芳養 武吉 和歌山 小松 長治 兵庫

◎法律科

山田 孫郎 高知 米村 嘉一郎 熊本
鈴木 孫三郎 埼玉 福井 支那 廣島
江上 平助 熊本 小田 三郎 廣島
宮西 耕一 石川 藤 佐 照治 新潟

◎國語漢文科

▲高等師範部第一部
計七十名

青木益太郎 神奈川 岡田甚四郎 兵庫
倉富 堅吾 福岡 妹尾富三郎 香川
樋口 清京 都 勝間 義昌 大阪
澁谷 丈夫 廣島 李代 公平 東京
重松 善一 愛媛 小林 宗重 長野
野中 新平 埼玉 武本寅五郎 岡山
飯岡岩太郎 慶手 真松 智道 佐賀
古川 碌郎 佐賀 中路 正衛 熊本
鈴木 與作 新潟 宇治田種雄 和歌山
隈部 義人 熊本 佐野格之介 茨城
山口 直平 茨城 新妻 武雄 宮城
内野 江一 埼玉 杉浦 智郎 宮城
石橋 勝巳 佐賀 池内泰三郎 徳島
大野 徳松 栃木 小山 巖崎 玉
岸 勝利 岡山 柏木 永一 和歌山
小野 定爾 岡山 浮田 秀正 東京
島 勇雄 福島 石井 晴藏 千葉
計三十四名

◎同英語科

井上宗四郎 埼玉 根岸 一 北海道
白井 文彦 大分 佐々木 眞 福井
五月女傳一 埼玉 藤井 啓一 三重
長坂嘉一郎 石川 藤崎 俊一 千葉
中村 岩夫 東京 鍛冶本信治 長 大阪
水口 茫 東京 原 長助 山口
村杉 清一 千葉 島田 祥 香川
井上幸次郎 埼玉 程島芳一郎 栃木
遠藤順吾郎 慶手 山元 兵七 滋賀
池崎 知康 熊本 赤松 六雄 徳島
松浦健之助 三重 川口 興道 三重
石原 孝 山梨 松澤 荒喜 愛媛
阿曾政二郎 千葉 小林 潔 石川
野村 四朗 山口 若生大四郎 宮城
松井 清治 栃木 一色 清照 愛媛
藤井 武雄 島根 山口 篤 島根

岩崎 秀吉 岐阜
計三十三名

▲高等師範部第二部

◎數學科
西田 小平 静岡 關谷 透 大分
菅野 省吾 慶手 阿部徳三郎 福島
水谷徳次郎 神奈川 柴山植之助 長崎
李 百 齡 支那 太田 秀一 長崎
計八名

◎理化學科

明戸 一耶 埼玉 吉岡春之助 京都
馬 鳴 支那 多々良省三 東京
三船修一郎 秋田
計五名

▲次學年特待生

大學部政治經濟學科第壹學年 井上厚三郎
同 第貳學年 平田專太郎
同 法學科英法科第壹學年 濱口 八郎
同 第貳學年 馬場 友義
同 文學科哲學科第壹學年 玉ノ井宗一
同 第貳學年 有馬 貞一
同 英文學科第壹學年 田中 俊位
同 第貳學年 松井 益雄
同 史學及社會學科第壹學年 長船 威憲
同 第貳學年 石村 一男
同 商科第壹學年 竹島 正忠
同 第貳學年 齋藤 喜作
同 理工科機械工學科第壹學年 關根隆一郎
同 第貳學年 高橋市太郎
同 電氣工學科第壹學年 前川幸一郎
同 第貳學年 門倉 則之
同 探礦冶金學科第壹學年 川原 政一
同 第貳學年 小林 鴻三
同 建築學科第貳學年 馬場 眞三

▲各科得業生にして大隈侯爵夫人より

大學部 應用化學科第壹學年 山口 榮一
專門部 政治經濟科第壹學年 手島 傳
同 第貳學年 大室 壯一
同 法律科第壹學年 高井 忠夫
同 第貳學年 外岡茂十郎
高等師範部國語漢文科第貳學年 尾原 三郎
同 英語科第貳學年 長谷川啓三
同 國語漢文科第貳學年 横井 鏡一
高等 英語科豫科 漆山 禮治
同 第一部 長野 眞雄
同 第二部 篠崎 茂男
同 第三部 及川 仙
同 第四部 小柳 親一
同 第五部 水野 敏行

賞品を受くる者

大學部 政治經濟學科 石川 勝治
同 法學科英法科 大濱 信泉
同 文學科哲學科 青柳 宗平
同 英文學科 柳田 泉
同 史學及社會學科 瀨沼 寛二
同 商科 南方常太郎
同 理工科機械工學科 村田榮太郎
同 電氣工學科 杉江 敏雄
同 探礦冶金學科 佐原 武雄
同 建築學科 菊池 惟中
專門部 政治經濟科 金子 鎮
同 法律科 山田 琢郎
同 高等師範部第一部國語漢文科 青木益太郎
同 英語科 井上宗四郎

答 詞

吾早稻田大學は本日をして其第三十五回の得業證書授與式を舉行せられ朝野の貴賓光臨の顯揚に於て吾大學總長大隈侯爵閣下及び吾大學理事平沼博

士より切實懇到なる訓誨を賜りたるは生等得業生一同の深く感銘する所なり
生等是非薄の天分を以て規定の學科を修め得たるに過ぎずと雖も吾大學の校旨を服膺し總長始め諸先生の親厚なる薰陶誘掖に由り奮て社會に出て各自其の學び得たる知識を以て艱苦に屈せず心力の及ぶ限りを傾注し誓て吾校恩の萬一に報せんことを期す
蓋し願ふに現時の世態は大戦の波瀾を受けて百事紛糾し殆んど從來の秩序を攪亂したりと雖ども之を要するに向上進展の氣運は且夕鬱勃として我々の眉睫に迫り來る是の時に當りて宿弊を刷新し新興の慶運に乗ずるは我我青年の本務と信す
謹て燕辭を陳べ鄙心の存する所を披瀝し吾大學の益す向上進展の隆運に向ふを祈る
大正七年七月五日
早稻田大學大學部得業生總代 石川勝治

答 辭

早稻田の學園日に月に榮えて窮る所なく茲に第三十五回得業證書授與式を舉ぐるに方り朝野貴顯の寵臨を辱ふし且總長大隈侯爵閣下理事平沼博士より懇篤なる訓諭を賜る生等恐懼措く能はず光榮身に餘るを覺ゆ
願れば大正四年の秋身を本大學に置きてより胸に其教旨を銘し雲雪の勉學滿三年恩師の眷寵慈母の情よりも温に日々學理の殿堂に導かれて今や愛育の搖籃を辭せんとす
吾等が前に横るは洋々たる活社會の海各々西に掉し東に航し適歸する處素より千差萬別たりと雖も吾等が技量は一に是れ早稻田學園の賜なり總長閣下並に諸先生の愛撫し訓育し給へる所身山川を隔つるも心は永遠に早稻田を去らず生は異郷に送るも學は高遠の理想を離れず否離れんとするも離るる能はざるなり
惟れは國家多事今日より甚しきはなく吾國は歐洲

戰禍の圏外に立ち極めて安泰の境にあるが如しと雖も外交上の風雲必ずしも平穩なりと謂ふを得ず經濟上の趨勢必ずしも順潮なりと謂ふべからず寧ろ靜中の動警で奮勵努力すべき好機なるを知る或は是れ天運東洋に廻り来るの秋にあらざるなきか思ふて茲に至れば双腕鳴つて血躍るを覺ゆ生等小器不敏思ふ所大にして行ふ所小なりと雖も一片の誠心何事をかなさずして止むべき

生等今總長閣下及諸先生と袂を分つに及び衷心離別の哀感に堪へず而も如何にして其鴻恩に報ふべきかを知らず唯永く本大學の本旨に則り學び得たる過去三年の知識に渾身の心血を盡き各其本分を盡して訓諭に背かざらん事を期するのみ

大正七年七月五日 専門部得業生總代 鈴木孫三郎

答 辭

大正七年七月五日日本大學第三十五回得業證書授與式を舉行せられ朝野貴賓の貴臨を辱くし總長閣下及び平沼理事より懇篤なる訓諭を賜はる生等の光榮何ぞ之に加へん

生等の今日あるものは本大學總長始め諸先生の薫陶に職由するものにして其の恩何を以て之に酬ひん生等本大學に學ぶ事三歳有半今や業を卒へ出て教育の任に當らんとす

抑教育と國家との關係の密接なる其の盛衰は國家興亡のかる所實に教育は一國富強の源泉たり殊に大戰後の教育は眞に一國將來の運命を左右す生等が國家に對し報効の任を致し諸先生多年の恩誼に報するも一に此に於てせざるべからず職つて我國教育の現状を見るに道徳教育を叫ぶあり理化學の必要を云爲するあれども其の聲のみ大にして多くは理論に走り實際を忘れ或は偏頗固陋なる手段に訴へて青年の元氣を抑壓せんとし教權の絶對を

信じて個性を顧みず更に甚しきは時局の影響を受けて物的慾求に支配せられんとすかくの如くにして教育の効果を擧げんとするは難し

生等非才淺學と雖も本大學教學の主旨に遵ひ諸先生の教示を基礎とし艱難事に従ひ百難不撓の精神を以て他日消埃の功績を顯はし鴻恩の萬一に報ゆるを期すべし仰き冀くは永く生等を補導せられん事を聊か蕪言を陳して答辭となす

大正七年七月五日

高等師範部得業生總代 井上宗四郎

答 辭

維時大正七年七月五日日本大學第三十五回得業式を舉行せられ朝野貴賓の來臨を辱ふし總長大隈侯爵並に平沼博士は生等に賜ふに懇篤なる訓諭を以てせらる生等の光榮何物か之に加へん今回の得業者は壹千數百名に其中敝國學生の得業者も亦少からず惟ふに生等入學以來切磋琢磨數年に及び自由研究と獨立精神とを標榜せる本大學教育の感化を受け本日此盛典に列するを得是れ洵に總長並に諸先生の熱誠懇篤なる薫陶に職由せずんばあらず生等感激措く所を知らざるなり

凡そ國際の關係は複雑にして而も變化窮り無しと雖も幸にして日本と敝國とは平和の状態に在り目下政治上乃至經濟上に於て提携相離るべからざる情勢を呈するが故に益々進んで兩國の親善を圖るは蓋し今後の寢大急務なるべし生等驚下なりと雖も數年來本大學に學び得たる所のものを齎して故國に歸るの日は一意専心斯事に盡す東洋の爲め世界の爲め理想的文明の實現を期せんとす而して是亦總長並に諸先生の恩誼の萬分の一に報ゆる所以なりと信ず茲に敝國留學生一同を代表し聊か微衷を述べて答辭となす

大正七年七月五日

支那留學得業生總代 凌 驥

祝 辭

山河震盪して疆域旋轉し億兆塗炭の凄慘を極めて前途の終局未だ測度すべからざる世界大戰の今日に於て吾母校たる早稻田大學は波瀾萬疊の中に立ちながら講師職員評議員諸君が丹心赤誠を以て盡瘁粉骨したる成果は能く天下萬衆の信賴景仰を増進し才俊の來り學ぶもの日に月に多きを加へ今や正在學生一萬人を超え今期の得業生は壹千壹百餘名を算するに至れり我校友は此の母校の盛運に遭ひ不肖四郎左衛門此に校友總代として蕪辭を陳すれば自ら顧みて光榮の至大なるを覺ゆ

願ふに盛は衰を戒め隆は替を慎む今日の盛時に得業する諸君は前に曠古の大戦局を望み後に吾母校空前の隆運を控ゆ出處進退總て得意ならざる無し然れども此時に處し此運に乗じて能く其適切なる進路を取りて錯誤無きを期するは亦容易の業に非ず我校友は今回の得業諸君に對し一日の長を有するを以て爰に鄙言を述べて其盛能く衰を制し隆能く替を御し以て益々吾母校前途の向上發展を完くするを希望して己ます謹みて此に祝辭を陳す

大正七年七月五日

早稻田大學校友總代 田中四郎左衛門

早稻田工手學校 卒業式

附屬早稻田工手學校は七月十四日第十二回卒業證書授與式を午後三時より講堂に於いて舉行し、校長徳永博士より卒業生百七十六名に卒業證書を、各科の優等卒業生五名に大隈侯爵夫人寄贈の賞品を、各科特待生八名に特待證書を順次授與せられたる後、校長徳永博士の報告及訓示、早稻田大學代表者理事平沼博士の演説、同大學總長大隈侯爵の祝詞、來賓文部省督學官野田義夫氏の演説等ありたるが、詳細は次號に記載すべし。

- 其の後校外教育部本年度夏期講習會の決定せるもの左の如し。
- ▲廣島縣下府中町(主催者廣島郡教育會) 自七月二十七日至八月一日(六日間)
- ▲校外教育部消息
- | | | |
|--------|--------|--------|
| 原 濱吉 | 西村 眞次 | 本田 親二 |
| 徳永 重康 | 徳 永庸 | 土井 廣吉 |
| 大澤 一郎 | 小野 基樹 | 大平 三男雄 |
| 川原田政太郎 | 甲斐 秀雄 | 川口 潔 |
| 片山 利久 | 吉田 亨二 | 民野 雄平 |
| 立川 長宏 | 田井 善道 | 高室 九兵衛 |
| 玉川 溫徳 | 坪内 信 | 中村 芳雄 |
| 長澤 寸美遠 | 名川 昌治 | 長屋 辰郎 |
| 内ヶ崎作三郎 | 上井 磯吉 | 氏家 謙曹 |
| 上野 景明 | 上原 靜夫 | 野村 堅 |
| 野田 昇平 | 桑田 福太郎 | 黒田 武定 |
| 熊井 悌藏 | 間瀬 直一 | 眞隅 隆介 |
| 松下 新作 | 前田 多藏 | 藤井 隣次 |
| 藤井 鹿三郎 | 小室 靜夫 | 今和 二郎 |
| 後藤 曠二 | コックス | 小島 則久 |
| 淺井 郁太郎 | 有元 岩鶴 | 秋田 重季 |
| 足立 震太郎 | 北村 淑人 | 木村 三郎 |
| 宮田 修 | 平沼 淑郎 | 森 米二郎 |
| 望月 嘉三郎 | | |

海外發展の地方 教授 志賀重昂
▲栃木縣下宇都宮市(主催社下野新聞社)
自八月五日至九日(五日間)

講師 教授法學博士 中村 進午
同上 鹽澤 昌貞

教授 片上 伸
▲埼玉縣下忍町(主催者北埼玉郡教育會)

自八月二十六至三十日(五日間)
世界文明の大勢

教授 内ヶ崎作三郎
附記岡山縣三和の講習會は中止。福岡縣下

北野町は八月二日より五日間、同縣下大牟
田市は八月六日より五日間、福井縣下鯖江

町は八月十一日より五日間、秋田縣下大館
町は八月二十一日より五日間に決定。

●高等豫科第二學期編入試験 本大學高等豫
科各部(政、法、文、商、理工)第一年第二學

期編入試験は何れも九月一日より施行するこ
と、なれり。本年度は志望者頗る多數の見込

なれば、編入志望者は高等豫科事務所に就て
編入受験者心得を請求し、受験科目その他手

續に關する詳細を知るべし。猶ほ編入試験願
書受附は、八月二十六日より三十日迄なれば

志願者は必ず右期限迄に申込まるべし。

●三枝氏所有地の買入 今回三枝守富氏所有
地三百五十坪を買入れたるが、右は將來折を

得て建設せらるべき講師學生俱樂部敷地に
充てらる、筈なり。

●内藤、黒川兩留學生送迎會 教授留學生内
藤多仲氏の歸朝を迎へ、助教黒川兼三郎氏

の海外留學を送らん爲め、六月二十九日五時
麴町區永樂町永樂俱樂部に於いて之れが送迎

會を開く。席上平沼理事の挨拶内藤多仲氏の

謝辭あり。一同歡を盡して散會せり。出席は
主賓内藤、黒川兩氏の外左の諸氏なりき。

平沼 淑郎 山本 忠興 佐藤 功一
田中 唯二郎 吉田 亨二 氏家 謙曹

小室 靜夫 上田 大助 松本 容吉
坪谷 善四郎 前田 多藏 民野 雄平

大屋 敦 河合 勇 池田 龍一
柿沼 宇作 岡田 信一郎 坪内 信

早野 七太郎

校友會報

●校友會幹事會 七月二日午後五時麴町區永
樂町永樂俱樂部に於て開會。出席は

平沼 淑郎 渡邊 亨 田中 小太郎
石井 政吉 前田 多藏 渡邊 寅治

大塚 傳三郎 谷 紀三郎 齋藤 義一
磯部 倫一郎 鈴木 佐平次 小汀 利得

川口 潔

の諸氏にして左の事項に就き協議決定する所
ありて散會せり。

一、例規校友大會開催の件
一、卒業式校友總代祝辭朗讀の件

一、大正六年度決算の件
一、大正七年度會計現況報告の件

一、推選校友銜衡の件
一、評議員半数改選の件

一、校友會幹事改選の件

中央校友大會

七月六日午後五時より上野公園内精養軒に於
いて新得業生諸氏の歡迎を兼ね例規校友大會

を開く。定刻前より續々來會。開會待つ間の
休憩室も新舊交々交換せらる、歡談清話に氣

勢頓に揚る。
やがて平沼會長座長の下に議事を開く。先づ

左記、
一、大正六年度決算

を報告して之れが承認を得、次ぎに
一、大正七年度會計現狀

の報告あり。後ち
一、推選校友の件

も異議なく可決。更に
一、校友會規則改正案

に就き委員伊藤重次郎氏より一應の説明あり
たる所、山田英太郎氏右規則改正案に對し、

慎重なる調査を爲さんが爲め更に十六名の調
査委員を設くること、し、該委員は會長の指

名を以て銜衡委員五名を舉げて之れに銜衡を
託すること、せんとの緊急動議を提出し、異

議なく之を可決し、尙ほ
一、評議員半数改選の件

竝に
一、校友會幹事改選の件

も右五名の銜衡委員に之れが銜衡を託せんと
の同氏の動議容れられて可決し、乃ち平沼會

長より
齋藤和太郎、山田英太郎、池田龍一、宮田

脩、鈴木佐平次
の五氏を右銜衡委員に指名し、右銜衡は別席

に於いて之を爲し後刻之を報告すること、し
て議事を閉づ。

大正六年度早稻田大學 校友會決算書

(自大正五年九月一日
至大正六年八月卅一日)

収入之部

維持費 九、三四二、九二〇

早稻田大學補助金 一

同出版部補助金 一

學報賣上代 六五、五三〇

廣告料 一〇四、〇〇〇

受入利子 七九、二一〇

前年度繰越金 三、二九九、六六四

雜收 五、三〇〇

計 一二、八三六、六二四

支出之部

俸給諸給 七九三、九一〇

印刷費 四、九八九、三五〇

通信費 一、四七八、四七〇

筆墨紙費 八九、六六〇

集會費 三〇七、〇〇〇

集金手数料 五〇一、四六〇

雜費 一五、四四〇

本年度剩餘金 四、五六一、三三四

計 一二、八三六、六二四

備考 早稻田大學補助金一、〇〇〇、〇〇〇及
同出版部補助金三〇〇、〇〇〇は大正六
年九月に入りて收入せり

大正六年度早稻田大學校友會 資產負債表 (大正六年八月卅一日)

資產之部

科 目 金額

家屋 九、五五四、五一〇

假支出金 三、四三、〇〇〇

立替金 六、〇〇〇

公債證書 三一八、四〇〇

銀行預金 四七一、五九〇

振替貯金	四、三四二、〇九九	家屋買入代	九、五五四、五一〇
現金	九四五	借入金	九五二、三八〇
計	一五、〇九〇、五四四	諸預り金	二二、三二〇
負債之部		次年度繰越金	四、五六一、三三四
科	金額	計	一五、〇九〇、五四四

▲推選校友氏名

新潟市西堀前通七番町	新聞記者	吉川大介	明治四十五年校外生政治科卒業
同 市上大川前通九番町	遠洋漁業船具商	鈴木貫一	明治四十三年四月より同四十五年五月迄高等豫科商科在學
長岡市東神田町	長岡銀行員	澁谷省二	大正二年九月より同五年二月迄商科在學二年後にて退學
新潟縣中蒲原郡菟川村	村役場助役	本間民弘	明治十七年より同十八年に亘り英語本科在學
市ノ瀬	右推薦者	新潟縣校友會	
秋田縣平鹿郡淺舞町三二	農業町農會々長	村田光烈	明治三十七年四月より同三十九年二月迄豫科文科在學
同 北秋田郡慶集町	同 町長	成田重太郎	明治廿八年九月より同廿九年八月迄專政在學
同 仙北郡長野村	農業村會議員	小西益三	明治廿五年九月より同廿六年十二月迄專政在學二年後にて退學
秋田縣上崎港町古川町	木材商町會議員	館山祐治	明治四十年校外生法律科卒業
同 同 上酒田町	四十八銀行員	丸山松藏	明治四十三年校外生法律科卒業
同 河邊郡和田村	農業村會議員	佐々木忠藏	明治四十一年の十月より同四十二年三月迄專法在學二年後にて退學
福岡市本町四ノ一	右推薦者	秋田縣校友會	
日本橋區南茅場町四五	仲立業	葉室吉太郎	明治廿八年四月豫科商科入學同廿九年十一月退學
支那江西省廣豐	伊藤洋行支店長	酒井醇一	明治廿五年の九月より同廿六年の十月迄專政在學
京橋區南小田原町一、二八	吉原製鐵所營業及會計主任	野澤富七郎	大正二年四月豫科商科入學同三年七月迄了同年九月商科一年級にて退學
小石川區竹島町八	衆議員屬	齋藤才次郎	明治四十二年九月より同四十二年六月迄專政在學二年後にて退學
芝區白金三光町三三五	明治商業銀行員	鈴木敬義	明治二十三年九月より同廿五年七月迄專修英語科在學
右推薦者	中央校友會幹事會	太田哲雄	明治四十二年四月豫科商科入學大正二年五月本科三年級にて退學

平沼會長

斯くて食堂開かれ、一同談話の間に晚餐を俱にし、テザートコースに入るや……

今夕は久々に校友大會を開催致しました。御多數の御來會を得まして甚だ光榮に存じます。元來本年の春期に大會を開くべき順序でありましたが、未だその緒に就かざるものがあつたと同時に總長が病氣の爲に開會を延期するの已むを得ざるに至つたやうな始末でありまして、遺憾ながら春期には之を開會することを得なかつたのであります。併し本夕この會を開くに至りまして、御多數の御來會を得ましたのは洵に感謝致します所でありまして。

本日の校友大會に於きまして御招待を致しました來賓が二人あります。第一は今回支那留學生の監督として我が國に來られました所の江庸君であります。江庸君は明治三十九年我が早稻田大學を卒業せられて、卒業後本國に歸られて重要な地位を占められて居たのであります。本邦に於ける支那留學生の監督は實に重大なる任務であつて、この監督の任に當られる所の人材は支那國に於きまして特に人材を簡拔せられる事であると承はつて居ります。江庸君がこの選に當つて我國に來られましたと云ふことは我が早稻田大學として深く慶賀を致しますのであります。今後江庸君が留學生監督の任に居られます以上は我が早稻田大學に在學する支那留學生諸君も幸福であると同時に、日支親善の上に於いても効果が益々擧がる事であらうと信じますのみならず、我が早稻田大學が百七十餘名の支那留學生を收容して居ります關係上から致しまして、私を始め當局の者は江庸君と種々懇談を申し上げまして、學生教養上の事に就いて一層の力を盡したいと考へます。第二の來賓は片山三郎君であります。君は三十三年の卒業でありまして、之まで高知の

大林區署長を勤めて居られましたが、今回農商務書記官に榮轉せられて水産局の漁政課長の任務を執られ且又水産講習所の教授をも兼ねらるることになつたのであります。四面環海の我が國に於きまして漁業の最も重んずべきは申す迄ないことでありまして。片山君はこの重要な漁業に就いて種々経験を重んじられることであらうと存じますが、我が早稻田大學の校友中からこの重要な任務を執るところの人を出したと云ふことはこれまた我が早稻田大學に取つて名譽と存じます。

この機會を利用して、學校の現状に就きまして概略御報告致して置きたいと存じます。この事は既に昨日得業式の式場に於きまして詳細に御話を致したことであります。當日御出席にならなかつた御方も多々あるやうに存じます。既に御聞きになりました御方に對しては重複の嫌があるかも知れませぬけれども、暫く清聴を煩したのであります。第一に申し上げますとは校規改定の件であります。校規改定は多年の宿論であつて、私共が現幹部を組織致しまして以來この事一日も忽せにすべからざることを感じまして、早速調査に着手致した。その實現幹部は校規改定實施までの御約束を以ちまして従事して居るのであります。一身の利益から申しましたならば、一日も早くその任務を結了したのであります。しかしながら輕卒にこれを結了して以て一身の安きを圖ると云ふことは德義上忍び難い所である。このに於いてか鈍鈍に鞭つて大いに力を盡しまして、理事會に於きまして十數回の討論を重ねました。漸く二月に至りまして原案を維持員會の會議に附したのである。維持員會に於きましても數回の審議を重ねたのであります。さうして是より先き成立つて居ります所の校規改定調査委員會に附議したのであります。校規改定調査委

員會に於いて討議を盡した末、六月の十四日に至つて議了したのであります。その議了した所の改定案を再び維持員會の議に附し、維持員會は同六月十八日に一二修正を施してこれを確定致した。翌十九日に東京府にそれを差出し、東京府を經由して二十二日に文部省の認可を申請したのであります。唯今文部省に於きまして審議中であると云ふことに承はつて居ります。遠からず指令のあるべきことと信じて居ります。最も行政上の手續と致しまして、文部省で認可が済みまして、東京府豊多摩郡役所戸塚町役場を經由しないと我が大學には達しないのであります。けれども文部省に於いて認可があつたならば、直に電話を以て通知を願ふこととして置きました。さうすると東京府と豊多摩郡役所と戸塚町役場とは事務員を派遣して急速に運ぶやうに致したいと存じて居ります。

次に數字を列ねて聊か御報告して置くべき必要なことがあります。本年の高等豫科及高等師範部豫科に入學を志望致しました者が、二千四百五十八名ありまして、これに對し本年より學力考査をひきました結果、一千三百七十九名の入學を許可を致しました。別に規則に依つて無試験入學を許した者が八十七名あります。次に現在の教職員數は教授助教授講師の總數二百九十一名、職員總數二百二十九名、この二百二十九名の中には私ども理事と維持員とを包含して居ると云ふことに御承知を願ひたい。海外の留學生は唯今留學致して居ります者が倫理科、農業政策、經濟政策、金融銀行、自治制度、佛蘭西文學、この學科の者が留學をして居ります。本學年中に歸朝致しました留學生が民法、露國文學並に建築學の三學科に於いて各一名あります。なほ今後留學生として派遣を致します所の者が電氣工學に一名ありまして居ります。現在學生の總數は一萬〇

六名であつて、これを前年度に比較を致しますると四百二十四名の増加であります。得業生の總數は本年度の得業生を加へまして一萬四千三百十五名であります。會計の狀態は最も大切なことであると考へます。これはいづれ學報に掲載致しますることとありますが、五月末日に於きまして所謂假決算と云ふものを致した。假決算と云ふは五月末までの現状に照して決算を致して尙ほ八月の三十一日即ち年度の終りまでの收支を豫想して極めますのであります。これに依りますと、合計四萬七千七百五十五圓三十九圓五厘と云ふものが五月末に於きまして剩餘になつて居ります。もつともこの四萬何千に對しましては八月の三十一日までに支出を要すべきものがあるものでありますから、これが皆残るのではない。しかしながらこれを皆支出致しまして、なほ一萬六千七百三十五圓七拾九錢五厘を次年度に繰越すことになりまして、寄附金のことに就いても概略御報告致して置きます。第一期基金第二期基金並に御大典記念事業資金、これを合計しまして申込額が百八十四萬六千圓餘、實收致しました所の金額が百四十萬八千圓餘になつて居ります。本年度に於きましては御大典記念事業資金中より支出致しましたものが二つある。第一は恩賜記念館の増設工事第二は應用化學教室の新築であります。唯今學校の裏手に新築致して居ります煉瓦造建築物が即ち夫れであります。

以上は概略に過ぎないのでありますが、餘り又詳細に述べましても却つて御迷惑と存じますから極く大體の事だけに止めて置きます。本夕我々の甚だ遺憾に感じますことは總長大隈侯爵の出席せられないこととあります。昨日は非常元氣で卒業式に臨場されたのであります。昨夜から腹工合が悪いと云ふこととありまして、今日に至つて急に電話で御断りがあつた。諸

君と共に甚だ遺憾とする次第であります。しかしながら他の一方に於きまして、現下米國の學校に於いて名聲を轟して居られます所の校友朝河貫一君がこの席に臨まれて居りますと云ふことは御同様に深く喜ぶ所でありまして、之を以て本夕の御挨拶の辭と致すのであります。が、先刻あらうで指名しました詮議委員に改正規則調査委員、半数改選の評議員、及本會幹事御選定を願つたこととありますが、速に御選定になりました。唯今御報告になりましたからこの席に於いてこれを御報告致します。

君と共に甚だ遺憾とする次第であります。しかしながら他の一方に於きまして、現下米國の學校に於いて名聲を轟して居られます所の校友朝河貫一君がこの席に臨まれて居りますと云ふことは御同様に深く喜ぶ所でありまして、之を以て本夕の御挨拶の辭と致すのであります。が、先刻あらうで指名しました詮議委員に改正規則調査委員、半数改選の評議員、及本會幹事御選定を願つたこととありますが、速に御選定になりました。唯今御報告になりましたからこの席に於いてこれを御報告致します。

▲校友會規則改正調査委員

- 昆田文二郎 若林 成昭 齋藤 隆夫
- 伊藤重治郎 石橋 湛山 橋本 真藏
- 西岡竹次郎 國分 義一 増田 義一
- 山田英太郎 松山忠二郎 早速 啓爾
- 田中 穂積 渡邊 亨 大橋 誠一
- 上原 鹿造

▲評議員半数改選及補缺

- 柏原文太郎 上原 鹿造 池田 龍一
- 齋藤 隆夫 宮田 脩 鈴木 寅彦
- 田中四郎左衛門 三浦鐵太郎 關 和知
- 橋本 真藏 (以上半数改選)
- 小松 林藏 (黒川九馬氏辭任に付補缺)
- 植原 正直 (上島長久氏死亡に付補缺)

▲校友會幹事

- 德永 重康(教職員) 田中 穂積(教職員)
- 前田 多(教職員) 山澤 俊夫(十七年)
- 瀬端善一郎(十八年) 關 順一郎(十九年)

▲出席氏名

- 招待者(イロハ順)
- 一戸 直藏 五十嵐 力 服部文四郎
 - 原 隨園 本田 信教 徳永 重康
 - 大久保助正 大東直太郎 尾上 八郎
 - 片山 三郎 甲斐 秀雄 神尾 鏡吉
 - 金子 馬治 吉田 世民 吉田源次郎
 - 横山 有策 高桑 駒吉 立川 長宏
 - 武信由太郎 民野 雄平 立石 謙輔
 - 田井 善道 土屋 詮教 中桐確太郎
 - 中島半次郎 上井 磯吉 氏家 謙曹
 - 内ヶ崎作三郎 山本 忠吉 矢口 達
 - 前橋 孝義 煙山專太郎 江 庸
 - 昆田文二郎 小林 堅三 會津 八一
 - 阿部 真夫 佐久間 原 岸本能武太
 - 木村 久一 紀 淑雄 北澤新次郎
 - 湯淺 吉郎 宮田 脩 宮井 安吉
 - 鹽澤 昌貞 島村 民藏 日高 只一
 - 樋口 清策 關 與三郎 杉田金之助
 - 杉田金之助(二十年) 飯島廣三郎(二十一年)
 - 並木覺太郎(二十二年) 新井智三郎(二十三年)
 - 山田 末吉(二十四年) 田村 三治(二十五年)
 - 中桐確太郎(二十六年) 濱口 檢(二十七年)
 - 石井 政吉(二十八年) 川島清治郎(二十九年)
 - 都倉 義一(三十年) 石澤久五郎(三十一年)
 - 大塚傳三郎(三十二年) 大島居三(三十三年)
 - 齋藤 義一(三十四年) 杉田 駿(三十五年)
 - 伊藤重治郎(三十六年) 坂口 二郎(三十七年)
 - 森 盛一郎(三十八年) 田中小太郎(三十九年)
 - 石橋 湛山(四十年) 早川 徳次(四十一年)
 - 杉坂 源清(四十二年) 黒田善太郎(四十三年)
 - 鈴木佐平次(四十四年) 園田 格(四十五年)
 - 都丸 隆(大正二年) 堀川 直吉(大正三年)
 - 小江 利得(大正四年) 西岡竹次郎(大正五年)
 - 丹尾磯之助(大正六年) 石川 勝治(大正七年)

參會者(イロハ順)

井口 誠一	石橋 滿山	磯部倫一郎	武田道千代	辻 禮	塚越丘二郎
系永 転平	石井 政吉	伊藤重治郎	土屋 啓造	都築 豊吉	坪谷善四郎
井芹 繼志	岩下 天洋	池田 龍一	土谷 清房	土屋 功	名取 夏司
井田 三郎	伊藤幸太郎	石澤久五郎	中野禮四郎	中野 鐵平	中西 雄洞
市川 繁彌	石田賢一郎	石澤 愛三	水田金三郎	中村 敬三	並木覺太郎
岩井 清水	入江 岩次	今井 椿吉	永島富三郎	中村 芳雄	中野 勇平
池宮 末吉	池松 林一	池田 龍介	中村三之丞	中村 一英	中野 震藏
伊藤 嘉平	金城 英一	岩田 健吉	村田榮太郎	務臺 光雄	中野 震藏
石井 佐仲	猪田 五一	猪瀬 美計	白井 榮壽	下部 守之	浦邊 慶夫
堀 健	羽田 智證	橋本 真藏	植野 包吉	上野藏之助	内田 喜一
長谷川誠也	早速 整爾	原 長助	野崎 龍七	野間 五造	倉智 秀雄
西 宇七郎	錦織 幹	西山巴之助	草村 有美	桑田福太郎	山路虎之助
西岡竹次郎	星野辨五郎	堀川 直吉	山田英太郎	山口 成孝	山田 直人
星野 治作	星野 英夫	北條清三郎	山崎 峰與	山本眞太郎	山本榮太郎
富永 清祐	都倉 義一	伴野 簡造	山本 信政	山中勝之助	山田喜兵衛
富永 岩吉	富井 常臣	大橋 等之	山口善三郎	山田 純忠	山崎久五郎
小川兼四郎	奥田 秀彦	大江乙亥門	山崎祐四郎	松宮 三郎	前島 彌
大島居弄三	大橋 誠一	小野 庄乘	増田 義一	前田 多藏	松山忠二郎
大塚傳三郎	大澤 定男	大橋弘之助	増子喜一郎	牧 善三郎	前田 孝行
岡田 利男	岡村 弘	岡 光次郎	正山 三郎	町田 輝	松岡 正之
奥村 武雄	大森 喜六	小澤 衛	古殿 基	藤沼 春吉	古野 喬一
若林 成昭	渡邊 亨	渡邊代五郎	藤森俊一郎	福井 親	藤原 誠一
渡邊 寅治	渡邊長太郎	渡邊 癡男	古賀 光太	小林 好夫	小林 精一郎
神谷祐一郎	河野 九峰	影近 清毅	小林 環	小島 禎治	小林 義實
川口 潔	海塚彦三郎	笠松 實	近藤峰四郎	越宗 壽男	江上 弘遠
加茂與三郎	吉村 憲夫	吉野 盛義	寺田 義勝	淺川 保平	安藤 金平
吉永 松雄	吉原福三郎	谷崎善三郎	朝河 貫一	青地雄太郎	青木 啓平
高橋部素武	田淵 豊吉	高田 勇雄	荒井 兼吉	赤須 文吾	赤澤虎之助
高瀬 孝仁	高橋 龜吉	瀧 國雄	佐藤 正	齋藤 隆夫	齋藤和太郎
高橋 謙三	田村 保	種村 宗八	櫻井兵五郎	齋藤 義一	指田 賢助
橋 山人	谷 紀三郎	田中小太郎	佐藤 堅三	佐原 武雄	佐々木 眞
田中仙之助	竹内善太郎	種市 眞實	佐藤榮巳太郎	酒井 求馬	齋藤 泰治
田口 豊	巽 榮吉	高根澤長重	喜多 義之	木村 三郎	木内義太郎
伊達 光美	高見宗一郎	高橋 勇忠	岸 孝一郎	岸田 實	三木 武吉
			水谷 武	三島 眞藏	宮崎八百吉

- 三上徳三郎 三浦鐵太郎 三浦 憲三
 湊 眞五郎 水上藤右衛門 南方常太郎
 重友 芳夫 島野 金吾 清水留三郎
 島田 祥 白石 勝彦 志田 正雄
 廣川 九郎 平沼 淑郎 平野英一郎
 森 盛一郎 望月嘉三郎 森 辰次郎
 森島徳三郎 森 勝清 森 勝太郎
 森田 六郎 森田 信一 最上 勇
 瀬端善一郎 關口 盛一 鈴木佐平次
 杉田 駿 砂川 一平 杉原 敏一
 鈴木辰次郎 鈴木彌太郎

●在山下母校出身者懇親會 當代隨一の成金を以て自らは兎も角世人にだけは目されて居る此の山下にも敢て少数とは云へない母校出身者が日々業を勤みペンを走らせて居る。せめて其の中の在京者だけでも一堂に會し胸襟を開いて語り合て見たいとは各人の切なる希望であつた。偶々小林茂君(大正七年商)が近く新嘉坡支店に轉任せらるる、管であり、且つ橘義一(七、商)横田愛三郎(七、政)兩君の新たに入社せられたのを機とし、七月某日午後六時より丸の内永樂俱樂部では等の人々の爲めに送迎の宴を兼ねて山下校友の懇親會なるものが開かれた。主唱者たる舊母校教授で現に山下合名會社參事として敏腕を揮つて居られる伊藤重治郎氏を盟主として會するもの十二名。直ちに食堂は開かれ談話の間に晚餐を共にし、デザートコースに入るや、伊藤參事先づ立て懇切なる送迎の辭に加へて、早稻田と山下とが共に不羈獨立の氣魄に満ち野武士的境遇に於て不秩序に育つて来たのが、今や漸く組織を立て秩序を定めんとしつゝ、ある類似點數項を指摘し、山下將來の發展に就て社員の協心奮闘に待つもの多き所以を述べて一同を激勵せられた。之に對し小林、橋、横田三君

●株式早稻田會大會 七月十七日午後五時より丸の内永樂俱樂部に於て、同會第十二回夏季大會を開催す。來賓として法學博士河津遼氏及杉野喜精氏等食卓を共にせらる。卓上は最近の取引所問題の是非にて大に賑ひ、盡くする所を知らざる有様なりしも、講演會開會の時刻に迫りたれば、幹事長森盛一郎氏の挨拶ありて七時閉宴し、直ちに同館大廣間に於て、同會主催の講演會を開會す。聴講者約百名、近來稀に見る盛會なり。先づ堀田幹事の開會の辭あり。次て杉野喜精氏は、其目下主として計畫中の現物市場設置の趣旨、方法を説明せらる。流石に多年の研究と經驗に基くものなれば、一々肯綮に當り、聴衆を益する事多大なり。次て河津博士は、歐米に於ける、取引所の組織、取引所と監督官廳、取引所と仲買人、仲買人の社會的地位、及び是等我國との比較、等の問題につき例により該博なる引證を以て諄々講演せられ、聴衆の啓發せらるるもの甚大なり。最後に取引所總務課長森美之氏は最近頻發の、取引所に關する諸問題につき有益なる内談ありて、十時四十分閉會せ

り。尙同會現下の會員は四十餘名にして、當日の出席會員左の如し。(イロハ順)
 原田 光藏 堀田 正由 萩 窪 潔
 小田井紫朗 奥田 六郎 和田清之助
 横田 虎吉 田坂 靜夫 高野 昌平
 反町 茂作 筑紫 富雄 梅原 慎一
 野本福太郎 久保田眞一 山下 親
 貴堂彌十郎 藤井 英造 小松 徹心
 手塚 弘平 木下 茂 森 美文
 森 盛一郎

の謝辭あり。續いて來會者一同交々起て各自の經驗希望感想等に就き意見を吐露し、後とは縦談横議勝手次第。やがて食堂を閉ぢ休憩室に入り、又もや笑談歡話に時の移るを覺らず。十時過ぎ先は無事散會。因みに當夜の參會者左の如し。(五、生)

- 伊藤重治郎(三六英政) 鬼頭 忠一(四大政)
- 園田 格(四五商) 荒卷 繁藏(六大政)
- 北村民三郎(五商) 橋 義一(七、商)
- 小林 義(七、商) 横田愛三郎(七大政)
- 遠藤 盛彌(五、政) 永江 清(五、政)
- 小原 玄之(五、大法) 井出 久一(二大商)

●福岡校友會 福岡校友會にては今回福岡爲替貯金局長より下關爲替貯金局長に轉任せる校友木村甲一氏の送別會を兼ね例會を七月三日午後六時より新三浦に於て開催せり。久保幹事の送別の挨拶に對し、木村氏の謝辭あり杯盤の間歡談笑話に時ならぬ花を咲かせ、十時半盛會裡に散會せり。出席諸氏左の如し。(順序不同)

- 木村 甲一 丸尾 修 宮崎秀太郎
- 森永 彦二 泉 德藏 小野 直彦
- 菊竹 博 大野德太郎 竹岡 陽一
- 井出 德一 黒木要太郎 三隅 忠雄
- 入澤京太郎 川井 正進 久保 義美

●鹿兒島校友會 六月二十一日午後七時より同地大門口紫明館に於て今回北米視察の途に上る會員堀勇吉氏の送別會を開催せるが、席定まり配膳整ふや、日野辰次氏發起人側を代表して開會の挨拶並に情誼を盡せる懇篤なる送別の辭あり。右に對し堀氏の謝辭並に抱懐談ありて直ちに開宴紅裙酒間を斡旋して獻酬盛んに、興趣益々湧いて盡きず。酒間藤田委員より敷根村岡元喜藤太福山村厚地嗣磨兩氏

が遙かに寄せし堀氏送別の電報を披露し。其より一同校歌を高唱して豪快を遣り、頗る盛會を極め、十二時頃散會せり。當夜來賓堀氏の外出席諸氏左の如し。

- 男爵島津忠夫 日野 辰次 吉留仲之丞
- 岡山 秀平 白尾寅千代 宇都宮虎二
- 實松 竹二 前田 久盛 黒岩 正義
- 郡山貞次郎 竹之内静治 松元 清二
- 上野 秀盛 鹽田 武彦

●山梨校友會 山梨校友會にては今回校友山下覺次郎氏甲府地方裁判所檢事正として來任せられ、尙又校友大森慶次郎氏今回貴族院議員に當選されたるに就き、兩氏の歡迎祝賀の爲め去十八日午後六時より同市太田町公園望仙閣に臨時校友會を開催したり。席定まるや青柳徳太郎氏一同を代表し開會の挨拶をなし、次て正賓山下大森兩氏の答辭あり。夫れより酒間若街紅裙の斡旋にて各自打ち寛ぎ歡談に時を移し、十一時頃散會せり。因に同會にては來十月甲府共進會開催の時を下し、學術大講演會を開かんと目下協議中なり。當日の出席諸氏左の如し。

- 山下覺次郎 大森慶次郎 小林八右衛門
- 大森 團平 早川 富平 新津 隆一
- 關 善治 青柳徳太郎 淺川 湖郎
- 中村 長榮 石原 傳 内藤 正廣
- 松浦儀兵衛 淺川萬壽雄 中村 貢
- 河野 乾一 金丸親太郎 深澤 敬明
- 志村 支齋 清水金太郎 川久保光正
- 三森 明正 長田 瑛 長坂 長

●山形縣鶴岡校友會 七月七日鶴岡に於いて開會。集る者十八名。席上委員の改選を行ひ野尻、山口、佐藤(政)の三氏當選したり。諏訪常

番幹事より講演會の準備に就き諮る所ありたる所、野尻交渉委員より交渉經過の報告あり後ち、一同歡を盡して散會せり。(佐藤長作報)

●北海道校友會準備協議會 小樽校友會にては全道校友大會準備協議を兼ね會員大越友雄氏の送別會を六月七日午後六時内色町常盤に於て開會。當夜の出席者は主賓大越氏を加へ左記十八名にして、

- 今井 孝 池島 賢造 橋本文太郎
- 東田 基見 時田 準輔 大越 友雄
- 大橋 昇 和田 信一 加納雞次郎
- 嘉納虎太郎 村上 順平 山田直三郎
- 小田桐由次郎 淺山 正三 栗谷 香
- 有賀 梧樓 鹽野 恒吉 平峰 忠春

先づ嘉納常任幹事より大越氏惜別の辭を述べ之に對し大越氏の鄭重なる挨拶あり。次で嘉納幹事より來八月札幌に於ける全道校友大會に總長大隈老侯の招請につき札幌校友會代表者として上京せる今里準太郎氏の交渉報告を述べ、小樽側の大會準備委員として

- 橋本文太郎 渡邊 得郎 加納雞次郎
- 山田直三郎 山内重次郎 松崎 金藏
- 阿部 長咲(名簿順)

●函館便り(桑原安二氏より) 當地野球隊太平洋俱樂部部の招聘に依り母校野球隊一行は安部先生監督の下に七月一日來函せり野球隊試合は三日より開始當地太平洋俱樂部、札幌鐵道俱樂部及農科大學等にして當地としては空前の催しとして學生界は素より殆んど門外漢に至るまで多大の興味を以て迎へられたり素より未熟の團體として到底母校野球隊と對立すべきものにあらず共之れを動機として當地否木道野球隊に資する處あり所謂健全なる運動競技の發達を來たし一般社會に健全なる風潮を養成することを得ば幸甚の至りなり。

●安部先生 是常に社會問題を研究せられ斯道に造詣の深き人たる事は既知の事實なれば來函を機として各學校より懇請あり左記の通り講演ありたり。

●函館師範學校にて『教育者の天職』 函館商業學校にて『團體生活の原理』 又一般公衆の爲め公會堂に於て『都市之經營』の題にて約一時間半の講演あり。都市として施設すべき諸般の事柄に付き當地地勢上より詳論せられ極めて凱切なる講話あり。多大の感動を與へられたり。

●函館早稲田會 是六日午後六時より五島軒に於て先生並に選手一行の歡迎會を開催せり。席上龜井氏は歡迎の辭を述べ安部先生は之れに對し謝辭を述べ、次いで學校の極めて良好の發達を示しつ、ある現況を述べられ、會員共に之れを祝福したり。先生の温容なる態度は能く各自をして胸襟を披かしめ、歡談笑聲極めて家族的の會合なりき。終りに安部先生は選手一行をして校歌を合唱せしめ、會

會

員は之れに答へて龜井氏の音頭にて選手一行の萬歳を三唱し、散會したるは午後十時半なりき。尙出席者は選手一行を除き左の二十一名なり。(イロハ順)

- 西村 忠一 兵藤 榮作 岡崎 孝穗
- 岡田 萬雄 勝浦 英一 龜井喜一郎
- 竹内 行男 武富 安雄 牛尾 英二
- 魚田 周摩 工藤勝太郎 桑原 安二
- 國領 榮一 小林正太郎 明石正一郎
- 青木 秀彦 木島 光治 北川 原誠
- 式 正次 平野 伸男 關口 賢三

●哈爾濱稻門會

哈爾濱も昨今稻門出身者益増加し、本春莫斯科引揚と同時に松浦商會の當間氏、熊澤洋行の稻村氏の歸哈あり。南滿より東亞貿易の得丸氏北滿電燈の中島氏入哈あり。又南滿鐵道調査課長唯根氏約一ヶ月滯留の際、松浦商會の中村氏發起の下に三月末料亭鶴川に於て唯根氏歡迎を兼ね同窓會を開けり。

その後稻門會組織の講熟し、六月二十三日を期し第一回の大會を舉行したり。會する者十七名に及び、頗る盛會なりき。即ち當日の參會者は次の如し。

- 谷口 敏吉(早中) 野阪 直裕(文科)
- 佐藤森三郎(豫科) 牛島 政康(政治科)
- 中島 孝夫(商科) 佐々木 積(文科)
- 岩崎 又三(法科) 阿部善一郎(商科)
- 得丸助太郎(政治科) 柿木由太郎(商科)
- 島崎 冠二(商科) 中村 秀穂(商科)
- 村岡 鈴彦(政治科) 押野 慶淨(文科)
- 彦竹 房吉(商科) 渡邊喜一郎(早實)

●奉天校友會

母校庭球場並に清水講師の來奉を機とし、之が歡迎を兼ね七月十五日正午松鶴軒に校友小會を催せり。出席者は主賓清水文學士、並に團員十六氏。在奉校友は石田武亥、小西春雄、丁鑑修、陶尚銘、山崎恒四郎、渡邊裕康、木谷辰巳、野中藤作、門間辰雄、關庚澤、蔣宗澤諸氏にして主客支那料理の午餐に歡を盡し、宴酣に及び團員一同起て校歌を大唱し、石田氏發聲にて母校萬歳を主唱し午後三時散會せり。(▽□生)

●大隈侯爵紀念品贈
呈資金申込者芳名
(第二回報告)

- 金百圓宛 男爵森村市左衛門殿 伯耆松平 頼壽殿 浦邊 義夫殿 中山 太一郎
- 金參拾圓宛 諸戸 精太殿 小野友次郎殿 坪谷善四郎殿 池田 龍一郎 松家徳次郎殿 上遠野富之助殿 池田唯之助殿 金澤 柳壽殿 池田唯之助殿 大宮 正雄殿 逸見季次郎殿 竹本 宇吉殿
- 金貳拾圓宛 宮川鏡次郎殿 齋藤 隆夫殿 松澤 知司殿 松原 九郎殿 中村 進午殿 廣井 一殿 黒川 九馬殿 渡邊丑之助殿 島田 三郎殿 島田 孝一殿 杉田 駿殿 濱谷 信之殿 小出 富治殿 木曾三四郎殿 關屋 正之殿 新井智三郎殿 淺川 保平殿 江原 邦治殿 寛 克彦殿 長谷川榮一郎殿 内藤 鷲郎殿 瀧 清殿 秋元 定恭殿
- 金貳拾圓也 竹本 宇吉殿 逸見季次郎殿
- 金拾圓宛 宮川鏡次郎殿 齋藤 隆夫殿 松澤 知司殿 松原 九郎殿 中村 進午殿 廣井 一殿 黒川 九馬殿 渡邊丑之助殿 島田 三郎殿 島田 孝一殿 杉田 駿殿 濱谷 信之殿 小出 富治殿 木曾三四郎殿 關屋 正之殿 新井智三郎殿 淺川 保平殿 江原 邦治殿 寛 克彦殿 長谷川榮一郎殿 内藤 鷲郎殿 瀧 清殿 秋元 定恭殿
- 金五圓宛 島田 三郎殿 島田 孝一殿 杉田 駿殿 濱谷 信之殿 小出 富治殿 木曾三四郎殿 關屋 正之殿 新井智三郎殿 淺川 保平殿 江原 邦治殿 寛 克彦殿 長谷川榮一郎殿 内藤 鷲郎殿 瀧 清殿 秋元 定恭殿

●奉天校友會

- 東儀 季治殿 比佐 昌平殿 浮田 和民殿 星野新八郎殿 手塚五郎平殿 大橋 誠一殿 渡邊 寅治殿 空閑知憲治殿 里村 磯吉殿 青地雄太郎殿 井上 要殿
- 金四圓 湯 鐵機殿
- 金參圓宛 中山輔二郎殿 城田鶴五郎殿 堀龍唐之助殿 河内富次郎殿 横山 有策殿 渡邊 世仰殿 磯谷幸次郎殿 恒河 吉毅殿 伴野 賢造殿 中原 元次殿 酒井 谷平殿 荻原憲太郎殿 鈴木 昇平殿 増田藤之助殿 並木覺太郎殿 尾崎 鎰殿 小森 準三殿 笠井仁三郎殿 玉置 定彦殿 小泉 改平殿 淺川 和男殿 藤田莊太郎殿 杉坂 源清殿 松崎 金藏殿 田村 基殿 吉田 銀治殿 大島居春三殿 山田龜右衛門殿 磯部倫一郎殿 金子 寅雄殿 島山 一清殿 磯部倫一郎殿
- 金貳圓五拾錢 依田 直吉殿 黒川兼三郎殿 木村賢三郎殿 竹内 松治殿 上村 眞澄殿 三和彌三郎殿 田中小四郎殿 富永 清祐殿 吉田 定助殿 中島 義應殿 輪湖 正田殿 陳 國 權殿 永尾 文吉殿 大橋 福松殿 永井 清志殿 廣政 幸助殿 笠木喜四郎殿 鈴木 重孝殿 神 絢一殿 井上三三郎殿 別宮音五郎殿 早川 隆三殿 皆川 秀孝殿 宮坂 庸三殿 大峰 光彌殿 深川 彌作殿 春日井風藏殿 小林 福治殿 大石菊次郎殿 直井 元介殿 服部佑太郎殿 内海 東男殿 小林 定脩殿 岩永 藤樹殿 室伏 完殿 黒瀬 白殿 甲元 一郎殿 光信 壽吉殿 野澤 卯市殿 櫻井 好雄殿 大久保茂七郎殿 稻村 一殿 木原多賀二郎殿 櫻井 久彦殿 小汀 利得殿 高橋 文次殿 村上 篤夫殿 松井 郡治殿 内藤 三介殿 新保政太郎殿 脇 秀男殿 伊達甚太郎殿 陽淺 新策殿 賀岡 章殿
- 金壹圓五拾錢 西 一郎殿 仲野 鷹雄殿 玉川 保藏殿 扇浦 義一殿 桑原 義一殿 戸田 收殿 風間 忠任殿 岩井力三郎殿 坂本 隆昌殿 金榮 妙峰殿 長谷川益人殿 阿部 真夫殿 小室 靜夫殿 北澤新次郎殿 民野 雄平殿 甲斐 秀雄殿 中野權太郎殿 山崎 貞殿 牧野 鑑造殿 神谷 健夫殿 藤野 了祐殿 上田 大助殿 富田 逸郎殿 畔柳都太郎殿 界 直隆殿 吉田 靜致殿 牧野謙次郎殿 野村 聖殿 中島 泰藏殿 藤井鹿三郎殿 堀田璋左右殿 本田 信教殿 師岡 秀慶殿 五十嵐 力殿 密田真太郎殿 松平 康國殿 遊佐 慶夫殿 上井 磯吉殿 三輪桓一郎殿 馬田 行啓殿 氏家 謙吉殿 木村 晴光殿 平 逸平殿 今西 惲也殿 寺師 英麿殿 上川 季吉殿 關 松期殿 舟橋 達賢殿 安藤 正雄殿 齋藤 正治殿 三宅 晃殿 姜 完善殿 豐村 與殿
- 島田 恭平殿 栗原 雅信殿 藤村徳次郎殿 矢崎豐太郎殿 小林 光次殿 江藤 哲藏殿 久山 順平殿 渡邊 昂殿 湯淺 義雄殿 立川 長安殿 新井 忠吉殿 小林 行昌殿 萬年虎喜賀殿 崔 益俊殿 前橋 孝義殿 永田市次郎殿 小林 重平殿 三島 藤太郎殿 宮川 庸三殿 大橋孫三郎殿 市橋 敏雄殿 進藤 行雄殿 木口 重彦殿 中野 實範殿 川久保 正殿 山口 猛殿 中野 實範殿 町田 歌三殿 齊藤 未學殿 久佐賀義直殿 水野 勝殿 久保 義美殿 岩田豐之助殿 新津 保雄殿 百瀬 計馬殿 北村 正俊殿 倉島 一郎殿 大島正七郎殿 岩崎 賢造殿 澁谷 桃二殿 淺川 湖郎殿 平山 忠善殿 關 淺吉殿 遠藤 寛殿 田内 盛嘉殿 大内 進殿 澤村幸一郎殿

鈴木時之介殿	島田頌之助殿	橋田 稻慶殿
村岡 清次殿	大山 萬吉殿	本多 助信殿
松井 久吉殿	栗林 宗參殿	岡崎 直樹殿
高田 通泰殿	佐藤勝太郎殿	渡邊淺治郎殿
新田 義彦殿	飯塚 愛造殿	古川 忠治殿
早川 了祐殿	田中 三郎殿	高垣 光藏殿
山泉 利重殿	高野 昇平殿	竹中 正雄殿
秋山榮次郎殿	河野 智精殿	横山 賀利殿
市村 英輔殿	松崎 久殿	小松 忠男殿
塚越又四郎殿	稻津 秀光殿	駒込譽之助殿
辻木作太郎殿	中谷 重松殿	高市 義寬殿
長田 宜殿	藤井 政八殿	久保 元治殿
二位 岩雄殿	田代 正直殿	松園 進殿
岸井 保殿	荒江啓次郎殿	白井 祐昌殿
山田金次郎殿	水谷 甚二殿	山上 吉藏殿
三田村信之助殿	新井 昌平殿	徳本 賢一殿
鬼塚長次郎殿	井上賢太郎殿	鈴木 寅彦殿
櫻井善兵衛殿	大久保林造殿	戸枝 貞殿
紺野 孟平殿	奥野 匡一殿	沼尻 道利殿
原田 實殿	田井 善道殿	百万 精三殿
中村恭太郎殿	久保内 智殿	濱打 義也殿
太田 一郎殿	藤田 通成殿	岩淵 澄夫殿
中西 雄の殿	後藤五郎右衛門殿	曾木 重貴殿
高橋 重寛殿	功徳林俊宏殿	喜多 義之殿
曾根原俊行殿	李 鳳 九殿	南部 正寛殿
松平 英殿	安東 吉郎殿	片山 豊殿
真田 直輔殿	谷口 龍殿	山本秀左武郎殿
柿崎喜代治殿	豊川 善包殿	釜田 喜信殿
山口 正雄殿	高木 來喜殿	木村 真平殿
松本 軍平殿	渡邊治之助殿	齋藤 宇八殿
井上賢太郎殿	大井 美松殿	武田 精三殿
鈴木 祥熙殿	湊谷定次郎殿	富田儀三郎殿
西村 眞次殿	中村 靜一殿	丸島 敬殿
吉田 弘殿	幸田 厚隆殿	二本 千年殿
秋山 一三殿	高橋 鐵郎殿	國澤 秀雄殿

校友動靜

多々良省三殿 松浦誠一郎殿 岡 正徳殿
 小林 正美殿 竹野 長次殿 齋藤 武殿
 佐々木寛治殿 大庭 武市殿 片岡與七郎殿
 川口準太郎殿 紹慶 密殿 寛 守藏殿
 大槻 甲三殿 鈴木才治郎殿 丹尾磯之助殿
 (以下次號)

校友諸氏の動靜左の如し
 ●川勝藏太(四〇大政) 七月五日米國シヤートル
 港出帆歸朝後約三週間郷里丹波に歸省す
 ●多賀谷芳三(七政) 麴町區大手町一ノ一東京瓦
 新電氣工業株式會社勤務(小石川區小日向臺附一
 ノ二八青木葛次方)
 ●粟山 博(四五大政) 朝鮮滿洲より北京の視察
 旅行を終へて七月十九日歸京せり
 ●渡邊陸郎(七政) 有樂町一ノ二株式會社農工貯
 蓄銀行に入る(市外戸塚町字下戸塚三五六)
 ●松枝保二(七政) 時事新報社政治部記者となる
 (市外戸塚町諏訪八二)
 ●小林正氣(七大政) 東洋コンクリート工業株式
 會社に入る
 ●横田愛三郎(七大政) 山下合名會社に入る(赤
 坂區丹後町四六岩波方)
 ●志田正雄(七政) 大藏省主税局に入る(麻布區
 狸穴町一)
 ●森 勝清(七政) 日本橋區本茅屋町五、株式會
 社日本製鋼所東京本店に入る
 ●水野申三(七政) 名古屋市西區茶屋町三伊藤銀
 行員
 ●正山三郎(七大政) 日清生命保險株式會社勤務
 ●矢倉岩次郎(五政) 朝鮮大邱府朝鮮銀行大邱支
 店勤務
 ●大沼銜太郎(四五政) 市外王子町大字船方二一
 四、王子煉瓦株式會社に入る

●大島正一(三九政) 南米より歸朝、古河鐵業株
 式會社嶺山部に轉勤
 ●高橋與左衛門(三政) 鐵道院官吏(芝區琴平町
 二番地六〇號田中又四郎方)
 ●兵庫金次郎(四政) 神戸市株式會社神戸川崎銀
 行動務
 ●大磐誠三(四大政) 會計検査院に轉任(小石川
 區宮下町五八)
 ●荒卷繁藏(六大政) 日本橋區吳服町二山下石
 炭株式會社勤務
 ●久保内智(三政) 大阪市西區西道頓堀通四丁目
 共同石炭商會勤務
 ●久保田勤(六政) 茨城縣東茨城郡岩松村三藝鐵
 業株式會社高知嶺山に轉勤
 ●清水長郷(四一政) 讀賣新聞經濟部長
 ●豐村 與(六大政) 株式會社中村細門司支店に
 勤務
 ●池島誠三(三八大政) 神戸商業學校講師、甲種
 育英商業學校講師、私立三誠學舍主幹(神戸市中
 山手三ノ七二)
 ●荒井兼吉(七大政) 日清汽船株式會社に入り上
 海支店諸となる
 ●能美逸雄(五政) 兵庫縣赤穂郡相生町帝國汽船
 株式會社播磨造船所に轉勤
 ●元田重雄(二政) 熊本縣天草郡本渡町中西銀行
 勤務
 ●大場運次(四〇大政) 東京不動産信託株式會社
 を創立し社長兼事務取締役となる
 ●山段康之助(四三大政) 常盤貿易商會に入る(牛
 込區鶴巻町二二三)
 ●徳島幸一郎(六政) 南滿洲鐵道株式會社本社會
 計課に入る(大連市常陸町七號地勢洲館内)
 ●杉田兼藏(二八政) 千代田火災保險株式會社横
 濱支店參事(横濱市藤田町字西、一〇〇)
 ●埴原正直(三〇英政) 外務省通商局長に任ず

●山口成孝(六政) 東亞ベルト商會主任(牛込區
 通寺町二二)
 ●富岡義則(四五政) 兵庫縣尼ヶ崎市古河鐵業株
 式會社尼ヶ崎工場に轉勤
 ●福田梅吉(四一大政) 熊本縣天草郡本渡町天草
 電燈株式會社社長に就任
 ●竹中正雄(五政) 丸ノ内町一ノ一東洋織布
 株式會社勤務
 ●小林頗雄(三六法) 福島縣白河區裁判所判事に
 補せらる
 ●堤 政一(三四法) 平戸區裁判所判事に補せらる
 ●石塚與八(四〇法) 武雄區裁判所判事に補せら
 る
 ●吹澤健吉(三〇法) 宮崎縣延岡區裁判所判事に
 補せらる
 ●井闕十二郎(三大法) 鶴巻製菓株式會社取締役
 に就任(麴町區中六番町五五)
 ●福田秀雄(四四法) 岡山製絲株式會社に轉勤岡
 山市野田屋町一九〇)
 ●種市良實(七大法) 日清生命保險會社保險契約
 課に入る(市外巢鴨町一四八八)
 ●越宗壽男(七大法) 三井礦山株式會社に入る(本
 郷區駒込町一三水島方)
 ●織田和勝(七大法) 株式會社曾和商店横濱支店
 に入る(横濱市根岸町芝生九三三七)
 ●諏佐照治(七法) 銀座尾張町一丁目常盤商會に
 入る(麻布區廣尾町六八)
 ●内海清一(七法) 富士製紙會社に入る(市外下
 戸塚五五七高柳方)
 ●池田直記(七大法) 郵船會社に入る(横濱市中
 村町一五五七酒井方)
 ●岡安理平(二八行) 長崎市東濱町岡部商事株式
 會社勤務(當分同市出島町竹井屋方)
 ●永富貞平(二七行) 佐賀地方裁判所所長(佐賀市
 松原町一八)

●西川善太郎(3大文) 淺野物産會社通信部勤務

(府下上目黒東山一〇〇〇)

●湯尾雄次郎(4大文) 富山縣立礪波中學校在勤

(同縣西礪波郡鷹栖村竹田速成方)

●船田 勇(四五大文) 丸ノ内三葉十九號館東會

計人事務所に轉勤

●齋藤未學(四五大文) 富山縣立富山女學校勤務

●熊本捨治(四〇大文) 京都府京都第二中學校に

轉任

●滿所信太郎(7大商) 日本橋區濱町二丁目菅生

商店に入る

●藤沼春吉(同上) 同上

●稻生六郎(同上) 三井物産會社橫濱支店に入る

●月本松男(同上) 淺草區玉姬町小六製作所に入

る

●高澤濱之助(同上) 高田商會に入る

●中尾忠太(同上) 北海炭礦汽船會社に入る

●野間俊作(6大商) 門司市小森江町神戸製鋼所

門司工場に轉勤

●野尻陸一(7大商) 三菱商事株式會社漢口支

店勤務

●小林 茂(7大商) 山下汽船株式會社勤務

●持田宗治(7大商) 宮城縣栗原郡鷺澤村細倉高

田礦山鑛業事務所勤務

●飯島信道(7大商) 橫濱市太田町茂木合名會社

生絲輸出部に入る

●谷口真三(四一大商) 長崎市岡部商事株式會社

に入る

●大村榮亮(四二大商) 石狩國札幌郡江別町富士

製紙會社江別工場に轉勤

●吉田清一(7大商) 大阪市西區中道二丁目吉

田兄弟商會に入り桑港支店詰となつて七月三日

出發赴任 (Yoshihira Brothers & Co., No. 149

California Street, San Francisco, U. S. A.)

●富中長次郎(四一大商) 東京キヤッコ會社沼津

分工場に轉勤(靜岡縣田方郡三崎町大中崎)

●寺澤直人(四五大商) 大阪市西區南恩加島町地

先株式會社旭造船所に入る

●大宮光男(6大商) 東京電氣製鍊株式會社に轉

勤す

●伊藤佐久良(6大商) 日本郵船會社東京支店外

航課に轉勤(府下下谷谷一八〇八)

●中村新輔(四二大商) 大阪市東區糸屋町一ノ二

四に於いて電氣諸機械販賣業に従事

●友杉滿壽郎(四一大商) 合名會社鈴木商店に入

り安東縣興隆街鴨綠江運輸株式會社勤務(安東縣

六番通六ノ一)

●野田英三郎(3大商) 大阪市東區今橋四ノ一三

株式會社常盤商會大阪支店機械電氣部に入る

●清水光義(4大商) 南滿洲鐵道株式會社安東地

方事務所に轉勤(支那安東縣九番通九ノ二)

●守屋正太郎(6大商) 神戸市和田岬三菱造船所

勤務

●浮田秀樹(3大商) 岡山縣久米郡龍川村古河鐵

業株式會社山手鐵業所に轉勤

●立花盛枝(7大商) 日本郵船株式會社に入り新

鴻丸に乘組む(橫濱市日本郵船株式會社支店氣

附)

●富田仙之助(7大商) 山形縣西置賜郡津川村津

川鐵山事務所勤務

●卯尾田毅太郎(7大商) 神戸下里商店に入る(神

戸市熊内葺合町一七二一ノ九六荒卷方)

●石井孝一(6大商) 京都市四條通富小路角村井

銀行京都支店に轉勤

●田島孝一(7大商) 大阪市南區末吉橋通二丁目

安部幸兵衛大阪支店機械電氣部に入る

●伊藤重雄(7大商) 青森縣下北郡大湊大湊興業

會社に入る

●西尾四郎(7大商) 浪速銀行下關支店に轉勤(下

關東南部町二)

●杉田俊吉(7大商) 大阪市南本町三丁目竹尾治

右衛門商店勤務

●今城英一(7大商) 神田橋外今城旅館本店貸付

部勤務

●諸戸一郎(7大商) 藤田謙一事務所に入る

●皆川重義(四三大商) 茨城縣谷田部町土浦五十

銀行谷田部支店支配人

●野村山己(7大商) 橫濱火災海上運送信用保險

株式會社火災課勤務(橫濱市北仲通二丁目金龍館

内)

●堀畑正一(同上) 同上會社信用課勤務(同上館

内)

●小林 茂(7大商) 山下汽船株式會社新嘉坡支

店に入る (Kamashita Eisan Kaisha, Wharves at

Hongkong College Quay, Singapore)

●櫻井彌太郎(6大商) 村井銀行神戸支店詰

●谷口清次(7大商) 大阪市中之島二丁目日本メ

リヤス株式會社に入る

●酒井福次郎(四二大商) 服部洋行香港出張所に

轉勤七月十五日赴任(香港德輔道二十號服部洋行

内)

●田中秀穂(四四大商) 日本郵船會社本店船客課

に轉勤(下谷區東坂町六四)

●平田 保(7大商) 橫濱市増田貿易株式會社本

店勤務(同市石川仲丁一ノ三二本多買太郎方)

●中村健壽(7大商) 橫濱市山下町二二五、中外

貿易株式會社橫濱支店勤務(同市西戸部町六九四

森三郎方)

●山本已四治(6大商) 村井銀行京都七條支店詰

となる

●忍 健夫(5大商) 橫濱正金銀行北京支店詰

●遠藤敏郎(3大商) 前田商店を辭し大阪市東區

社を辭し郷里松江市才賀五ノ五に歸省

●武市俊明(四〇大商) 支那天津商業會議所書記

長となる

●大東藤吉(四四大商) 北海道釧路港眞砂町五一

木村組釧路出張所に轉勤

●木島英二(2理工) 株式會社松尾工場勤務(麻

布區東町三六)

●桑原義一(5理工) 麴町區八重洲町一ノ一東海

電化工業株式會社に轉勤(半込區山吹町一四八)

●水野 勝(4理工) 和鐵合資會社に入り福島市

萬世町三五和鐵合資會社事務所に勤務

●小磯健吉(5理工) 茨城縣助川驛日立製作所に

轉任

●三好正次(4理工) 京橋區新仙島町一ノ一、二

碌々商店製作部勤務(半込區高田町二)

●田代田三郎(6理工) 新潟市沼垂町北越製紙株

式會社新潟工場勤務

●田中政右衛門(4理工) 鐵道院大阪電力區勤務

(大阪府東成郡櫻木村放出鐵道官舎内)

●矢部直敏(7理工) 南滿洲鐵道株式會社撫順炭

坑萬達採炭所勤務

●谷口利光(7理工) 神奈川縣川崎町東京電氣株

式會社勤務(芝區二本榎町一ノ五九荻野治作方)

●橫瀬乙吉(四一英) 廣島縣立廣島商業學校教諭

に轉任(廣島市南竹屋町官有二七)

●高橋一人(4國) 廣島市廣陵中學校教諭(同市

國泰寺町二八)

●樋口 清(7國) 鹿兒島縣立川内中學校教諭と

なる

●中村岩夫(7英) 同上

●岡久毅三郎(四二歷) 神戸市史編纂囑託(神戸市

役所市史編纂室)

●藤山茂彦(6國) 兵庫縣知事秘書係(神戸市夢

野村尼ヶ谷一二〇橋口方)

●仙波尚知(四〇歷) 兵庫縣立柏原中學校教諭に

轉任す

●明田三太(三六史) 青森中學校を辭し青森市浦町橋本六二に居住
 ●森 浩(6國) 横濱火災海上運送信用保險會社東京支店詰となる(日本橋區通四丁目同支店內)
 ●飛澤勇造(四一歷) 群馬縣史編纂主任となり同縣廳學務課勤務(前橋市石川町二一)
 ●藤本啓一(7英) 京都府福知山中學校に赴任

轉居

校友諸氏の轉居左の如し。

●杉山令吉(講師) 小石川區丸山町四
 ●川原田政太郎(助教) 本郷區駒込坂町三六四番地
 ●田上友治(7大政) 小石川區水道端町二ノ一一
 ●福崎春樹(7政) 市外下邊谷三五吉水方
 ●那須善五郎(7大政) 大阪府西區南堀江下通二
 ●山本榮太郎(7政) 下谷區山伏町二ノ五二
 ●服部 暢(三〇英政) 牛込區市谷谷町九三
 ●近藤基喜(三二政) 赤坂區青山高樹町十二番地一號
 ●吉田吉太郎(3政) 高崎市連雀町九二
 ●吉田千嶺(三七政) 府下田端六〇四
 ●宮 周平(3政) 山口縣德山町三、八六三
 ●中谷篤三(四二政) 大阪府下東成郡天王寺村字天王寺一、九五四
 ●大關誠一郎(三二政) 京都府深草村紀念山上北林宗次郎方
 ●照沼信忠(3大政) 水戸市上市櫻小路
 ●野口爲義(6政) 姫路市河間町森川日本方
 ●山本篤一郎(5政) 神戸市養合大日通り六丁目八番地二ノ一
 ●志水東男(四四大政) 横濱市青木町九五(横濱生糸株式會社棉花部員)
 ●幸村四郎(7法) 神田區表猿樂町二大蜘蛛方

●小松長治(7法) 兵庫縣加西郡富合村玉野新家井上佐太郎方
 ●岡 雄太郎(三八法) 神戸市再度筋三十番屋敷ノ四
 ●福島久記(四五法) 東京市立深川圖書館々舎内
 ●岡井宗一(四〇法) 愛媛縣伊豫郡松前村北黒田
 ●吉田甲子太郎(7大文) 府下巢鴨町一、二一〇川口方
 ●村山至大(4大文) 市外巢鴨宮仲二、五〇三
 ●星野信之助(5大文) 牛込區横寺町九、藝術俱樂部内
 ●楠 茂市(5大文) 市外巢鴨村宮仲二、五一二
 ●新田孫三郎(四三大文) 本郷區本郷四、三九筑波館内
 ●那須信道(四五大文) 京都下京西手筋住吉町
 ●橋 高廣(四〇大文) 麴町區有樂町一ノ二第八號官舎
 ●大久保林造(四三大商) 小石川區表町一〇九
 ●上坂一雄(7大商) 小石川區高田老松町三五
 ●内田喜一(7大商) 赤坂區青山南町六ノ二三
 ●影山海一(7大商) 牛込區早稲田南町四三番地本多方
 ●玉井辰五郎(7大商) 本所區林町三ノ四九番地鷺尾方
 ●松本農夫也(7大商) 牛込區喜久井町三四番地山形章方
 ●寺田磯次(四〇大商) 福岡市新大工町三五
 ●島田孝一(7大商) 3305, Spruce St., Philadelphia, Pa. U. S. A.)
 ●長澤倉吉(四一大商) 四谷區舟町三二
 ●谷口豊次郎(7大商) 福岡市養巴町四八
 ●出羽正也(7大商) 牛込區赤城下町一四富田方
 ●小林謙二(7、大商) 朝鮮元山水町三丁目(貿易商)
 ●石ヶ森勝哉(5大商) 岩手縣盛岡市東中野二七
 ●近藤峯四郎(7大商) 府下中野町一六三四、山

●井關榮司(7大商) 赤坂區青山南町五ノ五一
 ●北條清三郎(同上) 市外大久保百人町三三三
 ●今井茂勝(同上) 甲府市錦町八
 ●川島剛一(同上) 芝區新錢座町九水野方
 ●松井進二郎(4大商) 大阪府西區阿波座上通二ノ二三
 ●柳川豊治(4大商) 本郷區菊坂町九四幸館内
 ●山田兵吾(2大商) 四谷區傳馬町一ノ三九
 ●小島麗吉(四一大商) 宇都宮市三條町一一
 ●八住俊一(5大商) 神戸市楠町四ノ二〇二番屋敷藤原方
 ●安間一夫(7理工) 麴町區四番町六太田方
 ●岡田庄三(7理工) 芝區白金志田町五四伊佐方
 ●村田榮太郎(同上) 下谷區竹町一二
 ●大橋精一(4理工) 大阪府西成郡今宮町字神合六三一
 ●普光江隆(2理工) 本郷區駒込林町一
 ●前坂重太郎(6理工) 四谷愛住町四三番地若槻幸太郎方
 ●津津美基(同上) 府下北豐島郡日本製麻株式會社南社宅第十五號
 ●内海東男(5理工) 福岡縣田川郡伊田町三井田川炭坑三坑社宅一四三號
 ●山口 達(6理工) 麴町區内幸町一ノ四
 ●藤寶太郎(3理工) 芝區本芝三ノ一九
 ●粟村 實(3理工) 大阪府西區築港四條通り二ノ二一
 ●松下甚三郎(5理工) 芝區神明町二五中ノ一七
 ●石原 孝(7英) 小石川區宮下町六二番地山梨共修社
 ●鍛冶本信治郎(7英) 大阪府南河内郡喜志村
 ●和田俊嶺(二六專) 北海道札幌區南四條東四丁目高田別院駐在(特派布教教師開教事務長)
 ●横山 驥(四一英) 本郷區淺草町七三
 ●竹野長次(3國) 牛込區鶴卷町一〇〇

●若生五郎治(四二歷) 宮城縣牡鹿郡石養町濱濱町一三
 ●山田直人(四〇英) 府下荏原郡駒澤村深澤一、七三九
 ●上遠野 要(三五推) 牛込區南町一二
 ●川島榮三郎(四四推) 牛込市ヶ谷鷹匠三
 ●谷口守雄(四五推) 四谷區永住町二

改姓名

校友諸氏の改姓名左の如し。

●松尾茂男(4政) 舊姓河野(大分縣別府町楠濱和田彦旅館別荘に於て旅館業従事)
 ●尾形龜五郎(四五大商) 舊姓堀内(府下荏原郡目黒大字三田大日本麥酒株式會社勤務)
 ●芦田止友(6大商) 舊姓新山(横濱市山下町東洋汽船株式會社營業所勤務、同市北方町西ノ谷七九五番地)
 ●東條藏治(5國) 千葉縣長生郡五郷村石神三七一番地

明治二十七年 邦語政治科出身 小笠原男太郎
 明治四十四年 專門部政治經濟科出身 里見 重吉
 大正三年 大學部商科出身 小沼 得藏
 大正元年 高等師範部英語及歷史科出身 野地義一郎
 明治三十九年 高等師範部國語漢文科出身 田中 成美

若諸氏の訃報に接し哀悼の至りに堪へず茲に謹んで弔意を表す

學會會合

基督教青年會

今春來の活動

米國研究會 第拾六回米國研究會を二月

八日午込區辨天町九一友愛學會會堂に開く。夜寒くして來會者少なきを感じし折柄、午後七時の定刻に至るや三十八名の出席者を得、最近渡日せられたるデイジー、ハリソグ氏の米國ニゴロ問題に附ての御講演あり。後ち本會常任幹事北澤新次郎教授は往年親しくニグロと住居して同問題を研究せられたる事を知る故、同じく御話を願ひたり。それより蓄音器にてニグロソングを聞きつ、色々の質問に入り、九時半閉會す。

▲聯合軍慰問大講演會、二月十六日本會は幾多歐洲の戰場に戦ひつ、ある青年學生を思ひ悲慘なる戰場に彼等を慰藉せん爲め、帝國基督教青年會より三名を佛蘭西戰線に送りしを助けん爲に、慰問後援大講演會を大講堂に開く。プログラム左の如し。

- 一、開會の辭 北澤教授
- 一、所感 高杉教授
- 一、歐洲軍慰問業について 江原素六氏
- 一、基督教青年の活動 島田三郎氏
- 一、閉會の辭 山本忠興氏

講演の前檄して『乞ふ歐洲に在る青年學生の戰友を思ふ赤誠を表して應分の寄附あらんことを』と言ひたれば聽衆者定刻前に堂に滿ちその數四百餘を算ふ。近頃になき盛會なりき當日は青年會會員諸君の献身の御援助によりて目出度く閉會を告ぐることを得しは深く感謝する所なり。獻金は直に早稻田青年會の名に依りて慰問本部に納めたり。

▲修養會、二月二十二日午後七時より辨天町友愛學會に開く。久布白直勝氏將來の青年と題して御話あり。今晚の來會者は北澤教授並

にベニンホフ教授を初め三十二名なり。會後茶話會に移り難談に時の過ぐるを知らず、歡を盡して九時三十分解散す。

▲米國研究會、三月一日午後六時半より友愛學會會堂に開きたり。前日より降りし雪解けて路の悪しきこと甚しく、加ふるに雪風にて身も切れる許りなりしに拘らず多數の來會者ありたり。ドクトル、スカダー氏の布哇の日米問題についてと言ふ題の下にお話あり。質問の時間に入りて九時閉會す。

▲ハーデー翁歡迎會、四月九日午後一時半六十五年振りに渡日せるハーデー翁を本大學に迎ふ。先づ高杉教授の輕快なる英語にて歡迎の辭あり。後ち翁は「親愛なる早稻田大學々生諸君に告ぐ」との演題のもとに二時間近くのお話あり。滿堂の學生は涙を落さんばかりの如き情に充されたり。中にも會場の正面の日米の國旗は宛ら日米兩國の厚き親善を物語れる様に見えたり。

▲春季大講演會、五月二十五日土曜日午後一時より大講堂に開く、プログラム左の如し。

- 一、トログリアン氏作 眞珠の木 岡田哲藏氏
- 一、所感 山室軍平氏

當日は試験の前なりしかど、二百餘名の來聽者を見たり。(六月十三日夜響雄記)

運動

庭球團の滿洲遠征

本大學庭球團一行は部長高杉教授勸修寺マネー引率の下に六月廿七日午後四時東京驛出發滿洲遠征の途に上りたるが、廿九日神戸出帆のハルビン丸に塔乘大連に向ひたり。(七月一日稿)

●水泳部の開始、水泳部は七月十日より房州鏡ヶ浦に於いて第十四回の水泳練習を開始したるが、所屬部員凡そ五十名南晴耕氏監督の下に日々練習し居れり。

●野球團の北海道行、野球團一行は六月二十五日池田伊藤兩選手先發し残りの十六名は市岡主將に率ゐられて同廿七日午後一時四十分上野發列車にて栃木縣太田原中學に向け出發したり。因に監督安部部長は同廿九日函館に直行せられたり。

雜報

●馬田講師の地方講演、講師馬田行啓氏は佐渡見學旅行の際七月七日同國河原田町有志の希望に依り、同町妙經寺に於いて「世界の左渡」なる題下一場の講演ありたるが聽衆約千名。又翌八日相川町小學校に於いて同町教育會、軍人會、青年會にて開かれたる講演會の爲めに「現代と宗教」の題下に講演ありたるが、是れ亦聽衆千餘名にて盛況を呈し、講演會終了後同氏の爲め歡迎會開催せられたりといふ。

●本野舊講師の逝去、舊講師本野英吉郎氏は病氣療養中の處、藥石效なく遂に七月十一日逝去せられ、同十四日午前十時青山齋場に於いて佛式葬儀を営まれたるが、氏は前本野外相の令弟にして讀賣新聞社主なりしを以て朝野名流紳士の會葬多く盛儀を呈せり。本大學よりは大隈總長(代理)平沼理事、田中教授其他諸氏會葬せられたり。

●入江職員死去、恩賜館員入江三夫氏は腸チブス病に罹り大學病院青山内科に入院療養中の處、七月十九日遂に死去同廿一日葬儀を営みたり。

●電車早稻田線の開通、江戸川終點より早稻田(大隈侯爵邸裏)に至る市内電車は六月廿六日より開通せり。

本號記事輻輳に就き「雜報」欄の一部及「通信」欄全部を次號に廻はすの止む可らざるに至れり執筆諸君并に讀者諸君の諒恕を請ふ

定・價・ 一部郵税共 金拾錢
一回一頁金貳拾圓半頁
廣告料 金拾圓四分ノ一金五圓

大正七年八月十日印刷
大正七年八月十日發行

東京市牛込區白銀町二十九番地三十五號
編輯兼發行人 前 田 多 藏

印刷者 渡邊 八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六百四十七番地
早稻田大學

發行所 早稻田大學校友會

